

大久保第2遺跡

1999年3月

宮崎県都城市教育委員会



遺跡遠景（遠くに霧島を望む。遺跡は写真下部）

序

都城市教育委員会は昭和61年度から4ヶ年間で市内全域を対象に表面調査による遺跡の確認作業、所謂遺跡詳細分布調査を行ない昭和63年度市内北東部の悉皆調査によって大久保第2遺跡が周知され今日に至っています。

本書は同教育委員会が平成9年身体障害者療護施設建設にともない実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書です。調査によって弥生時代後期の竪穴住居跡や周溝状遺構等の貴重な資料が出土しています。

本書が市民をはじめ多くの方々の文化財に対する理解を深め、さらに学術研究に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、福祉施設建設事業主岩川醸造株式会社

氏には発掘調査から報告書作成に至るまで文化財保護をご理解頂き感謝申し上げます。また、調査に際し関係した各機関や地元の皆様をはじめ発掘調査に従事した作業員の方々に対し心から感謝を申し上げます。

平成11年3月

都城市教育長 隈元幸美

例 言

1. 本書は都城市乙房町2191番地3外7筆内における身体障害者療護施設建設事業に伴い、都城市教育委員会が平成9年度に発掘調査の委託を受け実施した大久保第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は矢部喜多夫及び現場作業員が作成し、そのほか都城市教育委員会文化課職員乗光博、横山哲英、米澤英昭、文化課嘱託下田代清海の協力を得た。
3. 本書に用いた方位はすべて磁北である。
4. 本書に掲載した遺物実測図は、矢部喜多夫、雁野あつ子、池谷香代子、水光弘子、奥登根子が作成し、矢部喜多夫が浄書した。
5. 遺構・遺物の写真は、矢部喜多夫が撮影した。
6. 陶磁器に関しては、佐賀県有田町歴史民俗資料館 学芸員村上伸之氏にご指導を賜った。
7. 本調査により出土した遺物は都城市文化財整理収蔵室において保管される予定である。
8. 本書の執筆・編集は矢部があたった。
9. 本書で用い略記号は次のとおりである。

OHKB II -大久保第2遺跡

SA -竪穴住居跡, ST -周溝状遺構, SC -土坑, SD -溝状遺構, SP -柱穴,

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織と構成	1
II	遺跡の位置と環境	2
III	調査報告	4
1.	調査概要	4
2.	遺構と遺物	5
①	縄文時代	6
②	弥生時代	6
③	中近世以降	22
3.	自然科学分析	31
4.	小結	41

挿図目次

第1図	大久保第2遺跡試掘トレンチ位置図	2
第2図	周辺遺跡位置図	3
第3図	遺跡位置図	4
第4図	大久保第2遺跡発掘調査区域図	5
第5図	縄文土器実測図	5
第6図	遺構配置図	7～8
第7図	掲載遺物分布図	6
第8図	弥生土器実測図	6
第9図	大久保第2遺跡土層断面図	9～10
第10図	周溝状遺構(ST01)・1号竪穴住居跡(SA01)遺構実測図	11～12
第11図	周溝状遺構(ST01)内出土遺物実測図	13
第12図	1号竪穴住居跡(SA01)内出土遺物実測図	14
第13図	2号竪穴住居跡(SA02)遺構実測図	15
第14図	2号竪穴住居跡(SA02)内出土遺物実測図	16
第15図	3号竪穴住居跡(SA03)遺構実測図	17
第16図	3号竪穴住居跡(SA03)内出土遺物実測図	18
第17図	3号竪穴住居跡(SA03)内出土遺物実測図-2	19
第18図	4号竪穴住居跡(SA04)遺構実測図	20
第19図	4号竪穴住居跡(SA04)内出土遺物実測図	21
第20図	1号土坑(SC01)遺構実測図	22
第21図	1号土坑(SC01)内出土遺物実測図	22
第22図	包含層内出土遺物実測図-1	23
第23図	包含層内出土遺物実測図-2	24
第24図	包含層内出土遺物実測図-3	25
第25図	包含層内出土遺物実測図-4	26
第26図	特殊土坑実測図	27
第27図	溝状遺構内出土遺物実測図	27
第28図	ピット内出土遺物実測図	27
第29図	近世以降遺物実測図	28

写真図版

第1図版	発掘調査区域全景	45
第2図版	4号溝状遺構内遺物出土状況・特殊土坑半割状況・同完掘状況	46
第3図版	畝状遺構検出状況・1号溝状遺構土層断面	47
第4図版	高坏脚部出土状況・1号土坑検出状況・同タチワリ状況	48
第5図版	周溝状遺構及び1号竪穴住居跡精査・同完掘状況・2号竪穴住居跡遺物出土状況	49
第6図版	2号竪穴住居跡完掘状況・4号竪穴住居跡遺物出土状況・4号竪穴住居跡完掘状況	50
第7図版	3号竪穴住居跡遺物出土状況・3号竪穴住居跡完掘状況	51
第8図版	掲載遺物写真-1	52
第9図版	掲載遺物写真-2	53
第10図版	掲載遺物写真-3	54
第11図版	掲載遺物写真-4	55
第12図版	掲載遺物写真-5	56

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成9年1月17日付、岩川醸造株式会社代表取締役（鹿児島県曾於郡大隅町岩川6,557番地6）より都城市教育委員会文化課に都城市乙房町2191番3外7筆にかかる文化財の所在の有無についての照会がなされた。照会地は都城市遺跡詳細分布図の大久保第2遺跡（8004）内に含まれているため、同課では試掘確認調査が必要であると回答し、具体的な日程の協議をはじめた。

試掘調査は平成9年4月22日から同月30日において第1次を実施した。試掘内容は25のトレンチを設定し、その内4トレンチでアカホヤ火山灰層下まで掘下げ縄文早期の遺跡の確認をおこなった。結果、19トレンチから地表面下40cm前後で弥生時代後期及び近世以降の遺物が出土し、11トレンチからは該期の遺構も検出した。また、アカホヤ層下の4トレンチのうち北側2トレンチで早期該当の礫群が出土した。さらに、平成9年6月3日付、取付け道路部分予定地4,300㎡の照会があり、平成9年6月16日から23日かけて第2次の試掘調査を行ない、都合トレンチを6ヶ所設けた。試掘結果は、谷状の地形で御池ボラ層上部が削平を受けており、近世以降の遺構・遺物が若干出土した。

試掘調査の結果をもとに、対象地約14,000㎡のうち遺跡の破壊を避けることができない建物建設部分約4,000㎡に対し発掘調査を行ない記録保存を実施することで協議を詰めた。最終的に協定書は、工事実施を平成10年4月から行なうのため、平成9年10月から翌年3月までの期間において発掘調査を終了することで同意を得た。平成10年10月6日現場確認を再度おこなったが、耕作の中断により雑草や竹等が生茂っており調査に着手できる状態でなかったため、委託者に刈取り撤去をお願いし、10月14日より重機による表土剥ぎを始め、翌日から作業員を導入し調査を開始した。

2. 調査の組織と構成

調査委託	岩川醸造株式会社		
調査受託	都城市長	岩橋 辰也	
調査主体	都城市教育委員会	教育長	隈元 幸美
調査総括	〃	文化課	課長 遠矢 昭夫
	〃		課長補佐 綿田 秋嗣
	〃		文化財係長 中村 久司
調査庶務	〃	文化財係主査	矢部喜多夫
	〃	臨時職員	原口 尚美
調査担当	〃	文化財係主査	矢部喜多夫
調査作業	和田利雄 鵜松雄 鵜芳明 荒ヶ田安夫 東春雄 東前利雄 曾原主吉 竹之内篤義 荒ヶ田エダ 有水トミ 松原ヨシ子 立野良子 木牟礼篤子 馬籠恵子 堀川カズ子 大山伊智子 永田美千代 庄屋幸子 高井田マサ子 藤田和子 今村ツチエ 抜迫清美 稲丸雅文（鹿児島大学学生） 外山隆之（鹿児島大学学生）		
整理作業	雁野あつ子 池谷香代子 水光弘子 奥登根子		

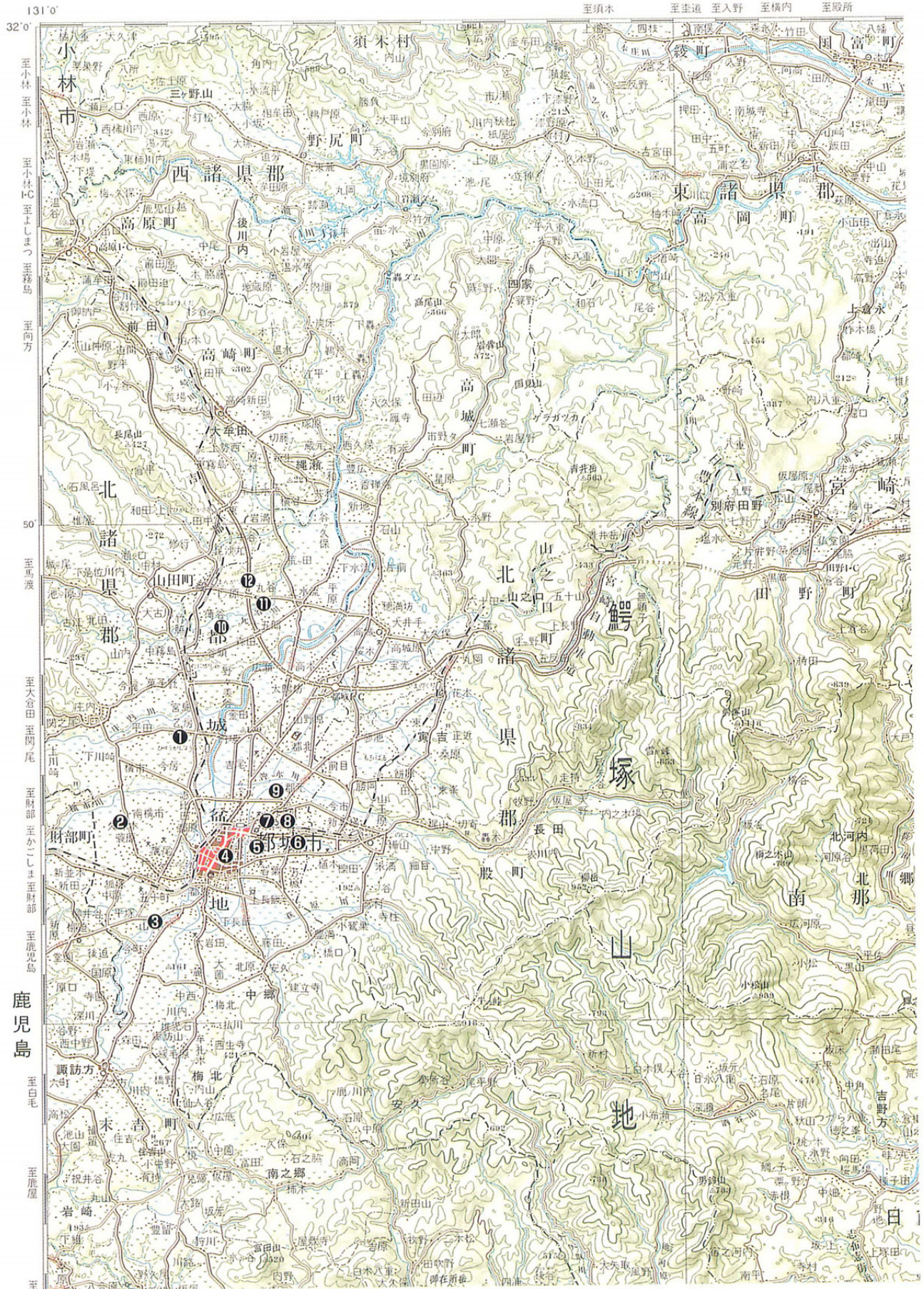
II 遺跡の位置と環境

大久保第2遺跡は都城市の北部、旧庄内村乙房町字大久保に所在する。都城市は霧島火山群と鱈塚山地にはさまれた盆地のほぼ中央に位置し、盆地を南北に切裂くように大淀川が走行し、その支流の小河川が西から東へ、また東から西へ葉脈状に本流へと流れ込む。これら小河川の両岸には河岸段丘が発達し、その眼下には開折された扇状地が低地水田面を形成している。当遺跡は大淀川の一支流庄内川により分断された南側台地縁辺に位置し、標高約160mほどで北側水田面との比高差は約15mである。

周辺遺跡に目を転じてみると、対岸の菓子野町に県指定の庄内（円墳）古墳（8067）と菓子野地下式横穴墓群（8066）が点在し、後者は昭和57年5基、昭和59年3基発掘調査を実施している。また、西隣の庄内町には応仁二年（1468年）都城島津家第6代北郷敏久の築城とされる安永城がシラス台地を利用した数曲輪から構築されている。また、平成6年には月野原第2遺跡（6040）で調査がおこなわれており、縄文後期・弥生中期・中世期の遺構・遺物が出土し、特に弥生中期では竪穴状遺構が出土している。昭和63年度遺跡詳細分布調査によると大久保第2遺跡の立地する台地には縁辺部を中心にかなりの遺跡が確認されている。



第1図 大久保第2遺跡試掘トレンチ位置図



1. 大久保第2遺跡
2. 加治屋第1遺跡
3. 岩立遺跡
4. 柳川原遺跡
5. 年見川遺跡
6. 向原第1遺跡
7. 牟田ノ上遺跡
8. 池ノ友遺跡
9. 祝吉(第1・第2)遺跡
10. 中大五郎遺跡
11. 前畑遺跡
12. 丸谷第1遺跡

第2図 周辺遺跡位置図 (1/200,000)

Ⅲ 調査報告

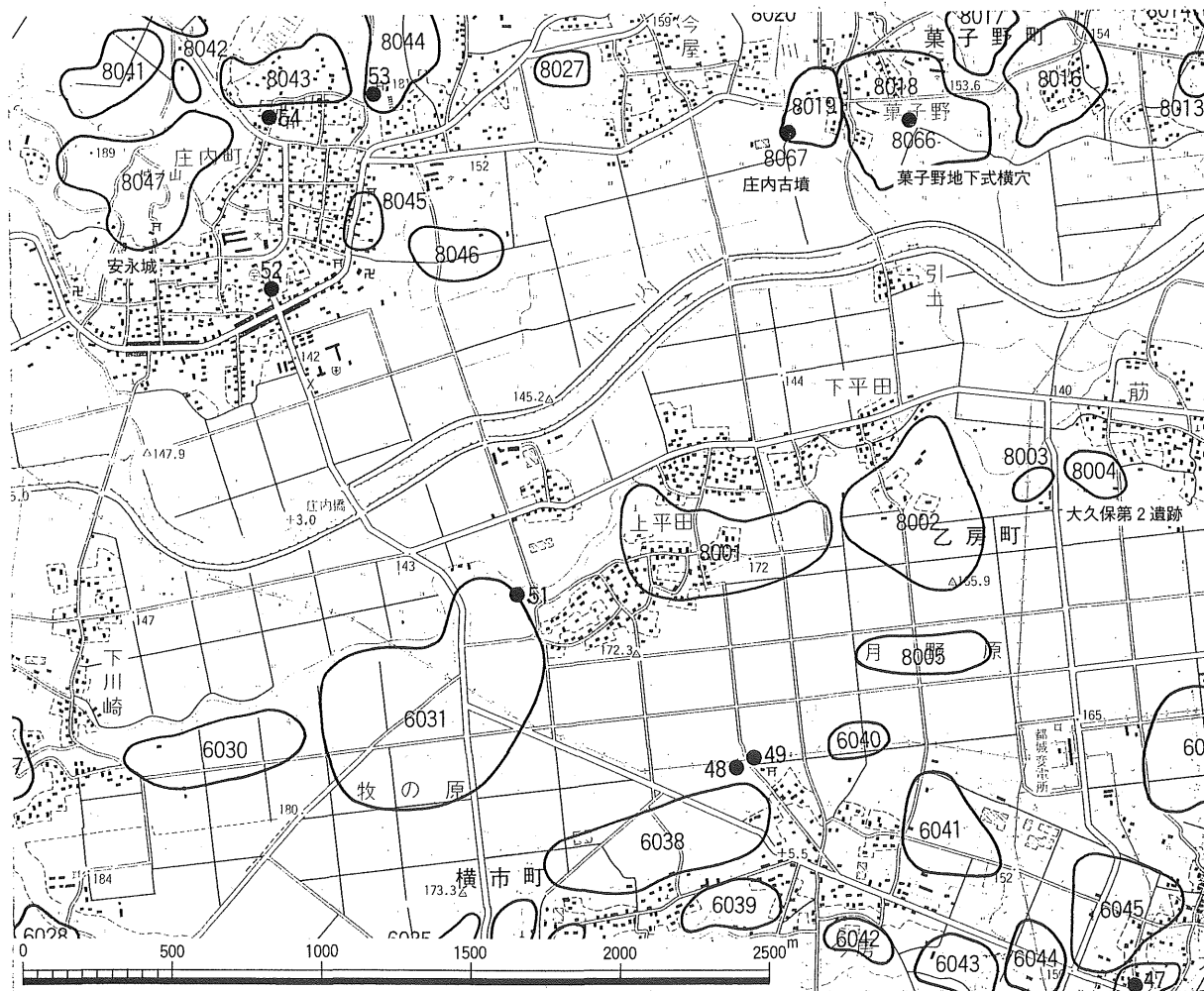
1. 調査概要

大久保第2遺跡は昭和63年度遺跡詳細分布調査（市内北東部）により、埋蔵文化財包蔵地として周知され、都城盆地の北西庄内川南岸のほぼ平坦な成層シラス台地上に立地する。調査地点は同台地の北側縁辺に位置し、標高約160mほどである。

調査は先ず重機により表土層約20～30cmを剥ぎ取り、検出層は近世以降では第3層黒褐色土層、弥生以前は第4層黒褐色御池ボラ混土層（漸移層）まで手掘りにより掘下げた。結果、近世以降の溝状遺構6条・柱穴、中世の土坑1基、畝状遺構・ピット、弥生後期の竪穴住居跡4基・周溝状遺構1基およびそれぞれの時期に伴う土器・石器・陶磁器類と縄文土器等を発見した。

遺跡の基本層序は第1層灰黒色土（耕作土）、第2層白ボラブロック層（文明期：桜島より噴火した火山軽石）、第3層黒褐色土層（遺物包含層）、第4層黒褐色御池ボラ混土層（漸移層）、第5層御池ボラ層と続く。なお、建物建設予定地内は試掘調査でアカホヤ層下の遺跡を確認できなかったため、調査は実施していない。調査区域の地形は調査前は東西北南方向ともほぼフラットであるが、第4層上面、言い換えれば検出面では南北方向では北側に向かって緩やかに傾斜し、B-5区を中心に北から谷状の落込みが延びている。

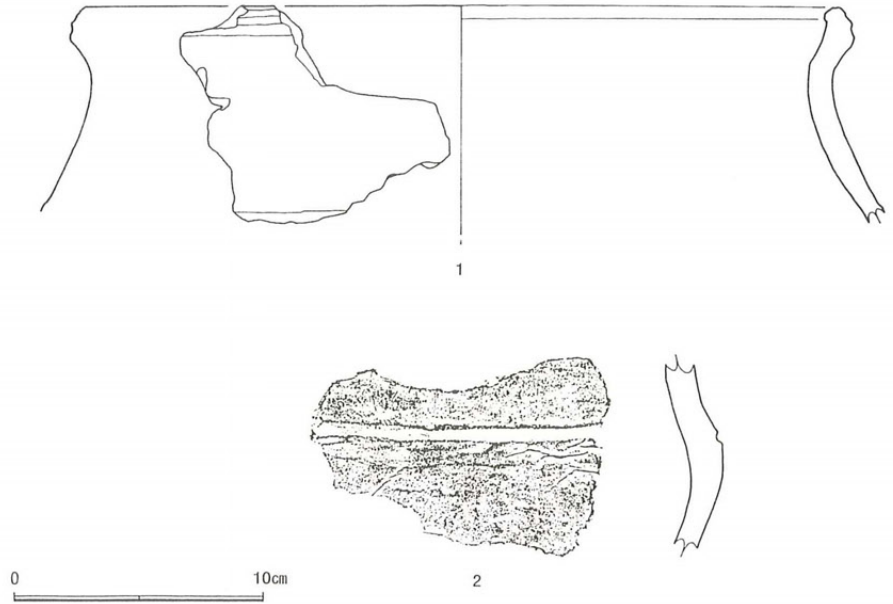
調査方法は公共座標系（SN線）に一致したグリッドを設定し、南北方向を北からアルファベットで、東西方向を東から算用数字で各グリッドを便宜上呼称する。



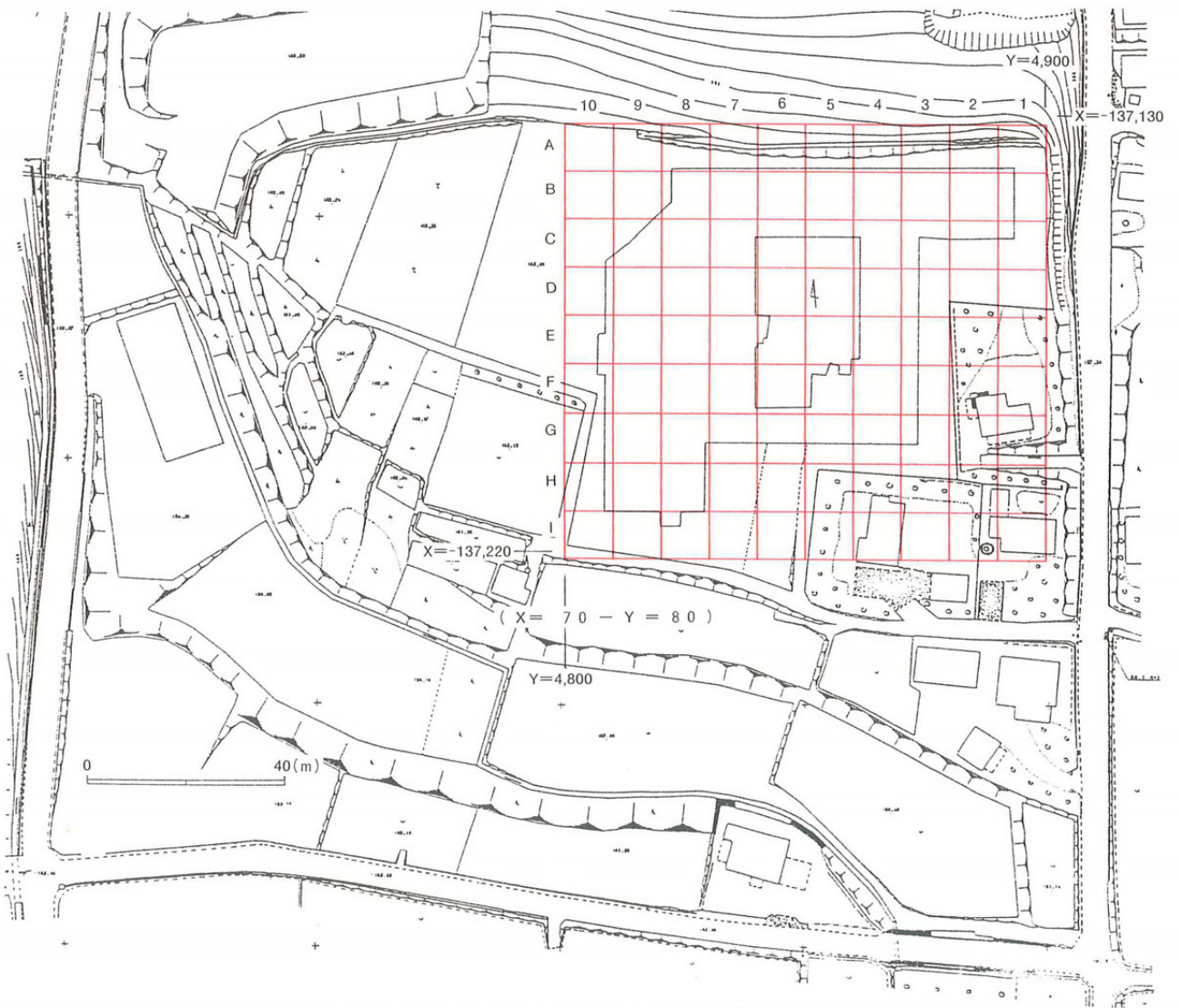
第3図 遺跡位置図

2. 遺構と遺物

約4,000m²の調査区域において、南東部はトレンチャーによる破壊が及んでいる。また、調査区西側では第1層と第3層の間に白ボラが縞状に堆積している。そのほかは第1層、第3層、第4層と明瞭に確認できる。遺物は2,000点以上取り上げたが、実測可能なものは少数でほぼ掲載した遺物数ほどである。以下古い遺構遺物から順次説明する。



第5図 縄文土器実測図



第4図 大久保第2遺跡発掘調査区域図

① 縄文時代

G-9、H-9区より出土。取上げ数では十数点ほどあるが、個体数では胎土、調整等から2個体あるようだ。01は深鉢形土器の口縁から胴部片、02は胴部片である。口縁肥厚部に2条、胴部最大径直上に1条の浅い凹線を施す。

② 弥生時代

G-8、9区より出土。03は甕の口縁部で、同端部に一条の貼付け突帯に刻目施す。突帯下は縦方向のハケメ、胎土に金雲母を含む。

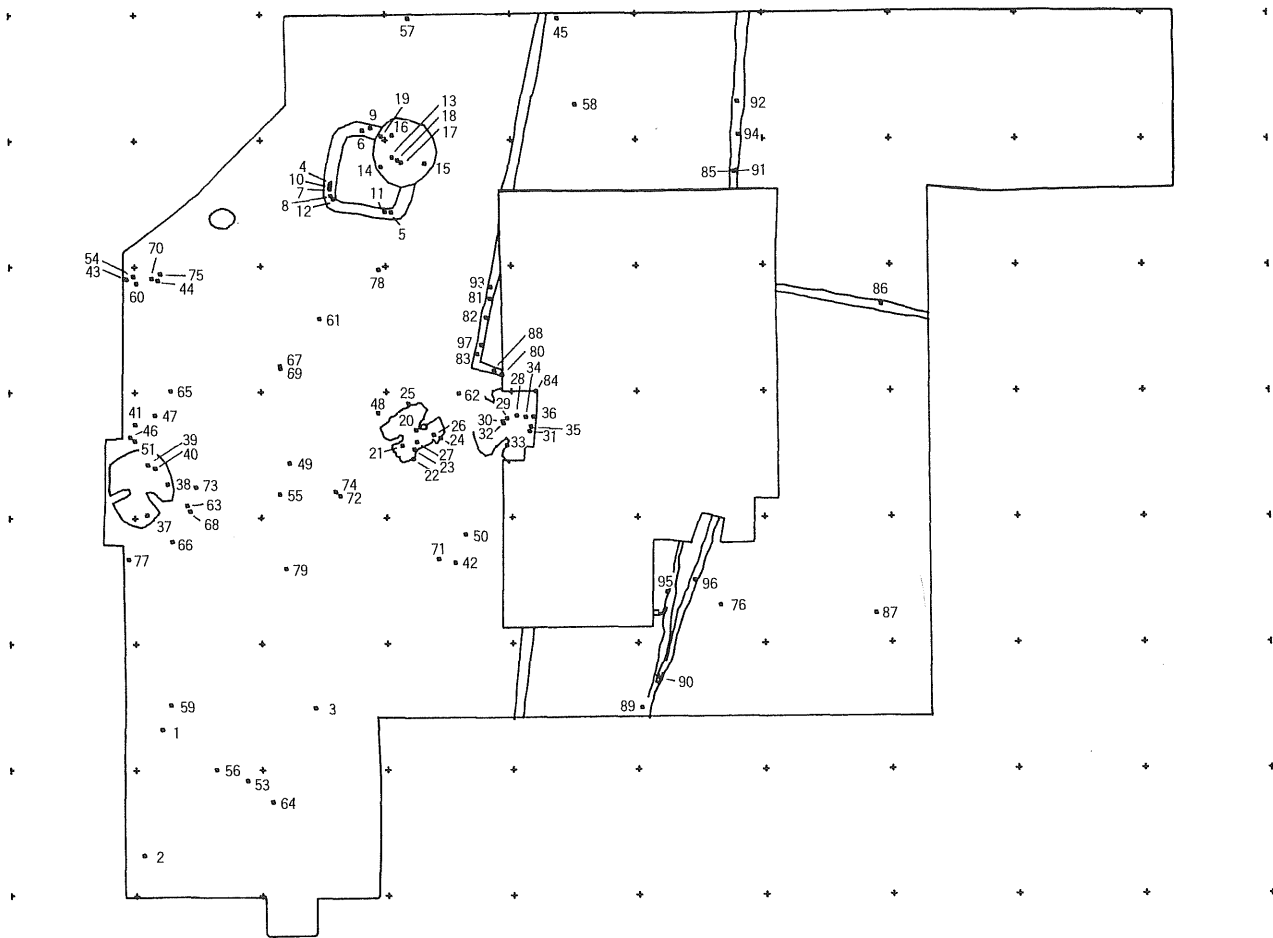
周溝状遺構(ST01) B-7,8及びC-7,8区で1号竪穴住居跡(SA01)と切り合うかたちで検出した。前後関係はST01が古い。遺構は第4層上面で確認し、平面形態は方形で一部北西部は隅丸で、断面は台形状を呈する。一辺は約7m、溝幅0.9~1.0m、検出面より深さ0.3m前後を測る。周溝内郭部に遺構は確認されなかった。04~06は甕形土器片で、04は底部(欠損)から緩やかに立上がり頸部でくの字に折れやや外反する。胴部最大径と口径がほぼ等しく推定31cmを測る。07は器台と思われる。外面に沈線と重弧文を施す。08は壺の胴部、09は鉢形土器で口縁部でやや内湾する。10は甕の中空脚台、11は壺形の底部と思われレンズ状をなしている。



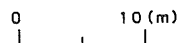
3



第8図 弥生土器実測図

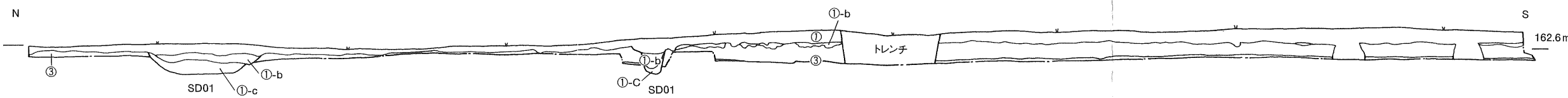
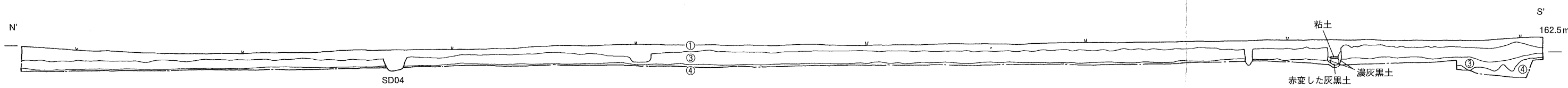
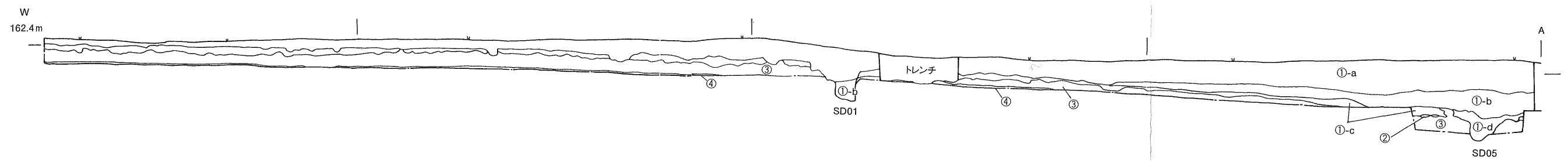
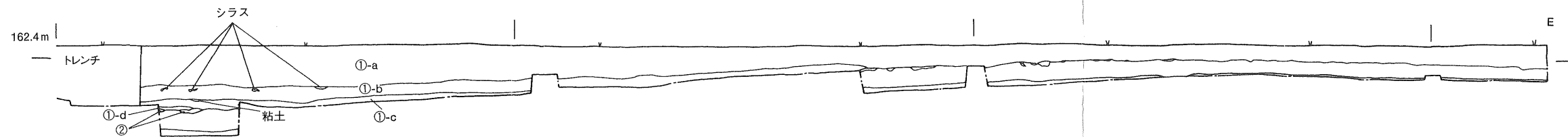
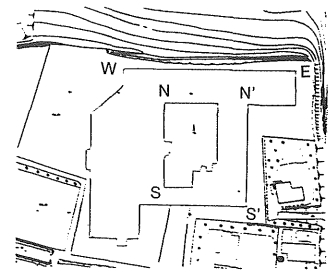


第7図 掲載遺物分布図



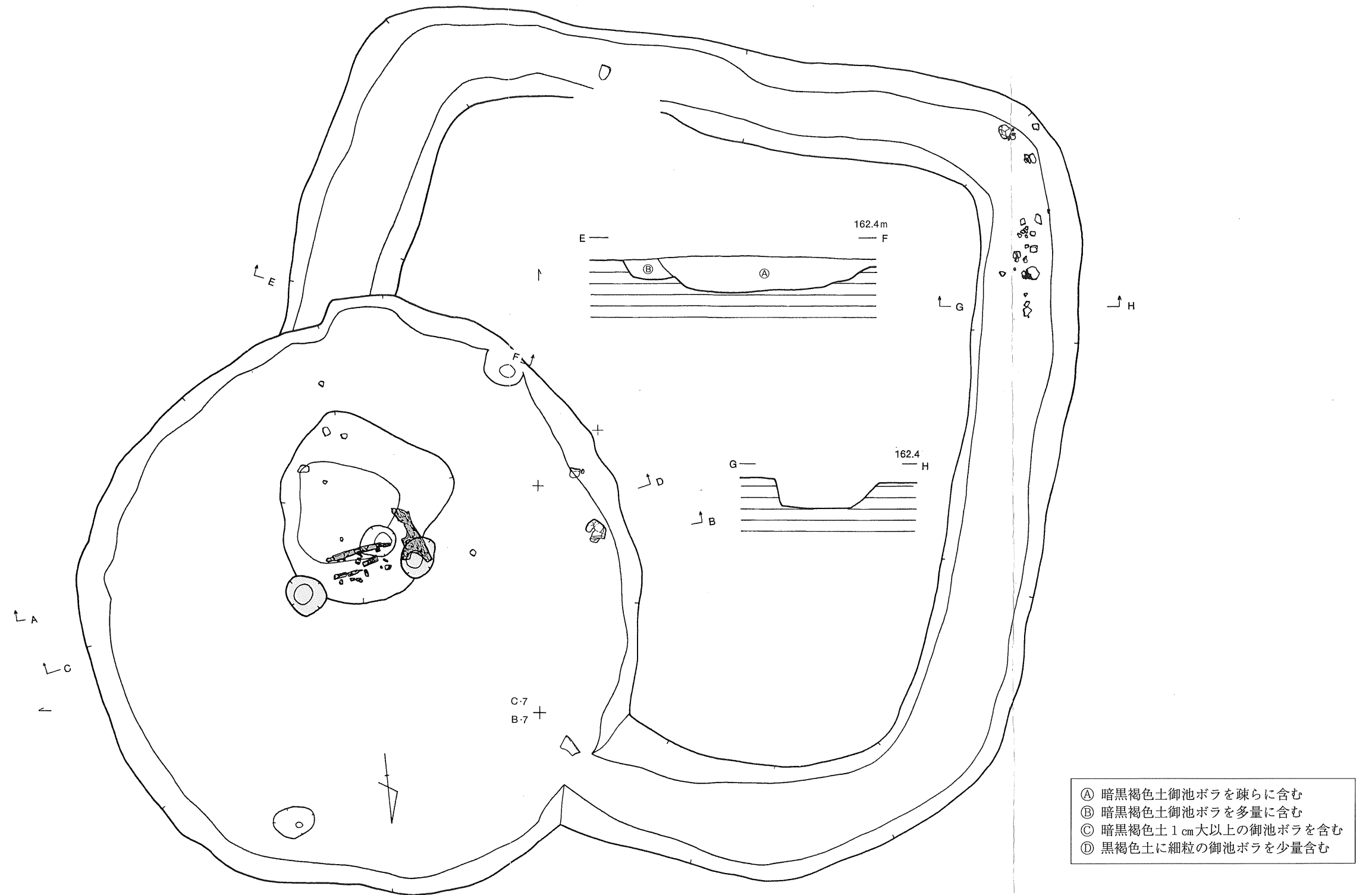


第6図 遺構配置図

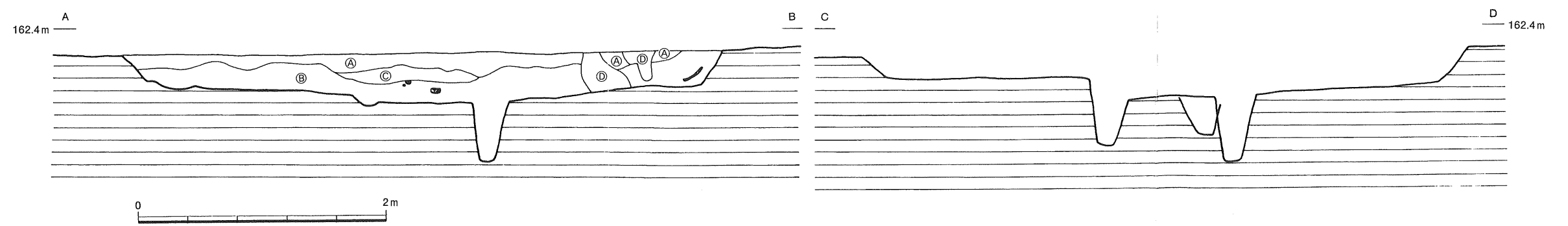


- ①-a 灰黒色土
- ①-b 明灰黒色土
- ①-c やや藤色を帯びた灰黒色土
- ①-d 濃灰黒色土
- ② 白ボラ
- ③ 黒褐色土
- ④ 黒褐色御池ボラ混土(漸移層)

第9図 大久保第2遺跡土層断面図



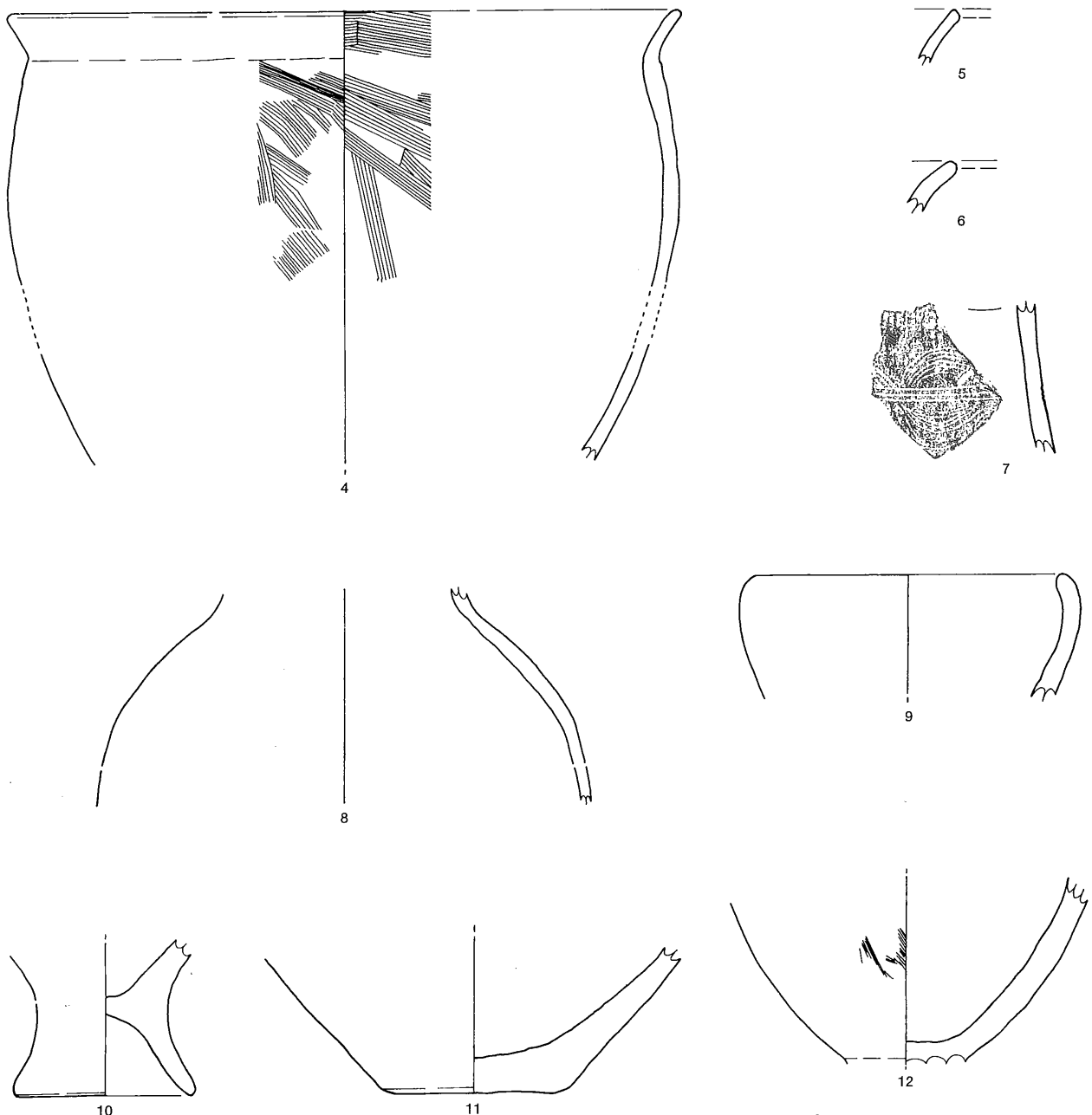
- ① 暗黒褐色土御池ボラを疎らに含む
- ② 暗黒褐色土御池ボラを多量に含む
- ③ 暗黒褐色土1cm大以上の御池ボラを含む
- ④ 黒褐色土に細粒の御池ボラを少量含む



第10図 周溝状遺構(ST01)・1号竪穴住居跡(SA01)遺構実測図

1号竪穴住居跡(SA01) ほぼ円形で南北方向約5.2m、東西方向5.0mを測る。南側周溝状遺構との切合い部分に突出部分がみられる。遺構中央に2本の主柱穴が1m間で位置し、その南側に浅い土坑状の落込みがある。また、中央付近床面5cmほど上で棟木や垂木の一部と思われる炭化材が出土している。13~15は甕形土器で13は口縁部がくの字に折れる。14は胴部から緩やかに外反しカキアゲの段をもつ。15は甕の口縁部片で口縁は緩やかに外反し、屈曲部に若干カキアゲの段が残る。16・18壺形土器の底部で平底である。17は手捏ねのミニチュア土器である。19は扁平の石器で両面に擦痕がみられ、用途については不明である。

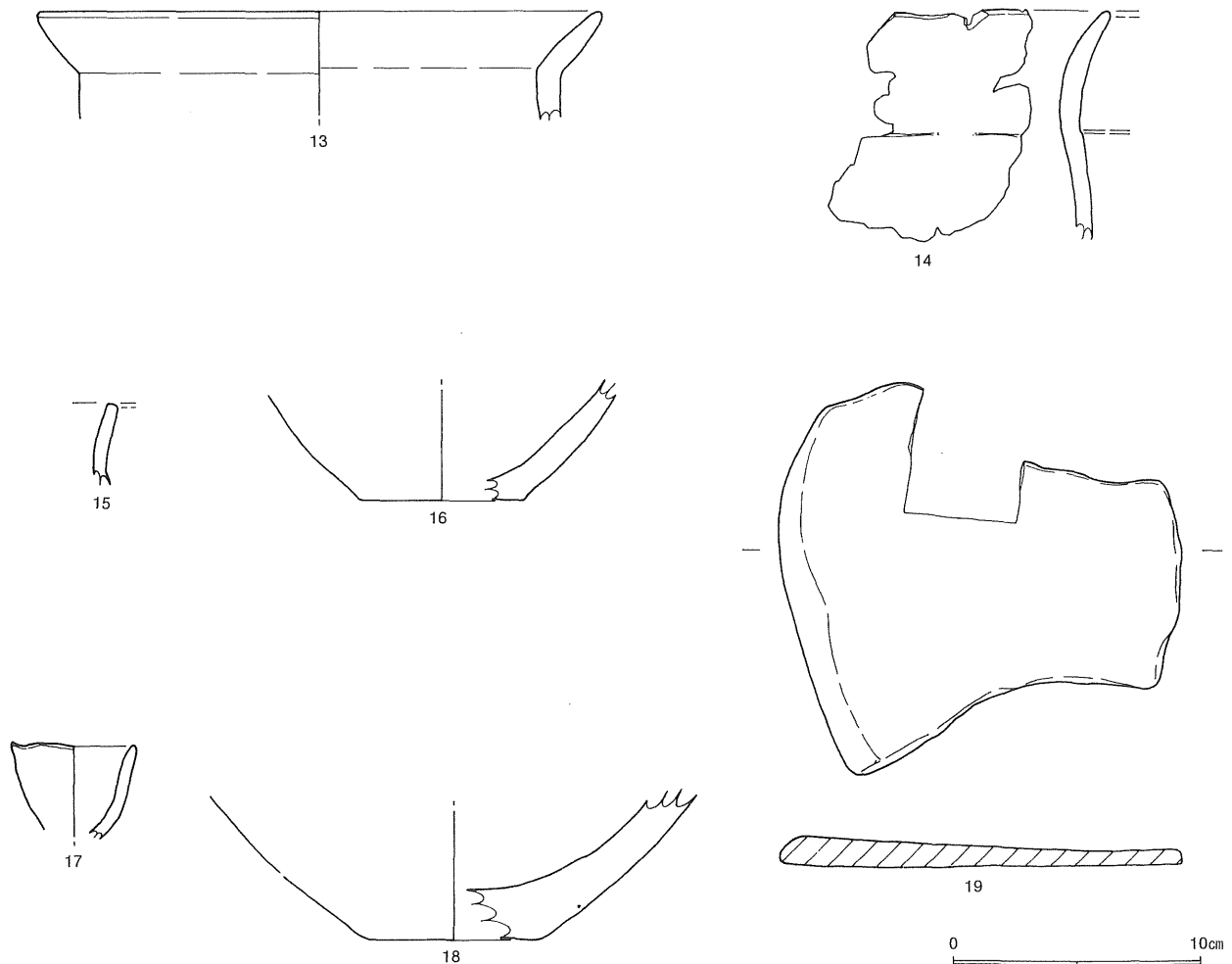
2号竪穴住居跡(SA02) E-7区第3層最下部で検出した。検出時は北東~南東方向が長軸の隅丸方形のプランとして確認したが、最終的な完掘状況では突出壁をもついわゆるH型の方形プランとなった。長辺最大4.4m、短辺最大3.6mを測る。主柱穴は1.8m間の2本柱タイプで、柱穴の位置は間仕切り壁とほぼ並行である。南側コーナーに壁帯溝が一部残存する。埋土は基本的には第3層黒褐色土であるがやや暗



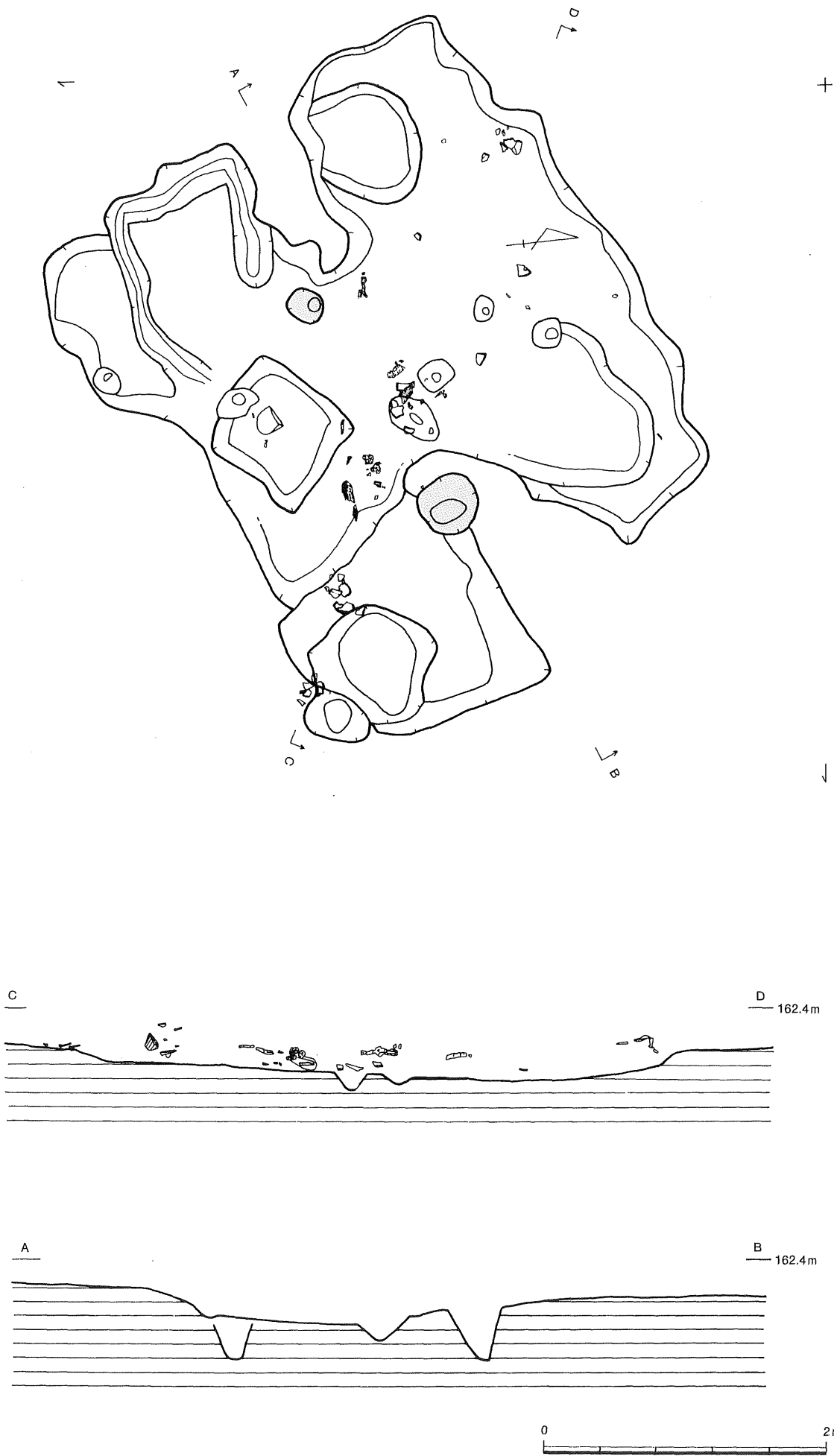
第11図 周溝状遺構(SA01)内出土遺物実測図

めで御池ボラが少量含まれるが、床面近くではボラの含有量が増す。20~23は甕形土器で20は胴下部からやや膨らみを帯びて緩慢に立上がり、丸みをもたせた頸部（屈曲部）にカキアゲによる段を有し、口縁は長めで外反気味に延びる。外器面にススの付着がみられ、胎土に砂粒を多量に含む。21~23はくの字口縁で屈曲部に調整工具により横方向にカキアゲ様の綾をもつ。胎土に砂粒を含み外器面にススの付着がみられる。24は小型の壺形土器で口縁部はくの字状に折れると思われる。胴上半は縦方向のハケメを施す。胎土に砂粒を含むが器壁は薄い。25は鉢形土器と思われる。ススの付着なし。26は蓋で胎土に砂粒を含み、口縁端から内器面3cm、外器面2cmほどまでススの付着がある。27は台石で両面に擦痕がみられる。

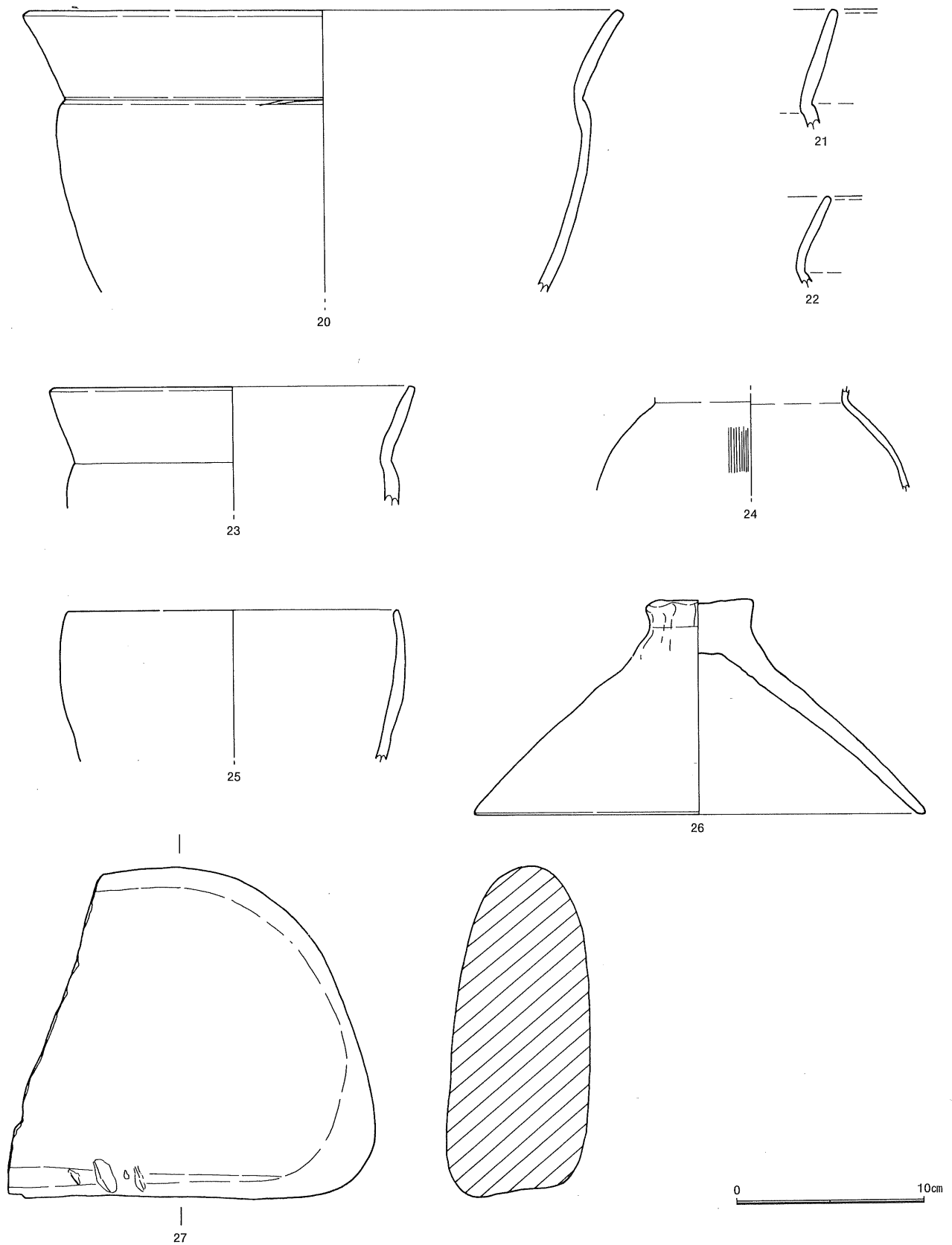
3号竪穴住居跡（S A 03） E-7、F-7区第3層下部で遺物の出土を確認。調査区外に入り込むため遺構の全容は把握できなかったが、推定径7m前後の花弁形住居跡で調査区内において2ヶ所に突出壁をもつ。主柱穴の配列は不明な点が多いが検出できた柱穴から円形に配置されると思われる。検出面でのプラン確認ができず、完掘間際でようやく平面プランを視認したため床面でのプランのみである。略南北方向に棟木、それと直行するかたちで垂木が部分的であるが炭化した状態で出土し、土器等も同一レベルでの出土である。28・29は甕形土器である。28は底部（脚台）が外反しながら開き、胴部にかけて緩やかに立上がり、口縁部は僅かに外反し屈曲部は綾をもたない。29は欠損しているがあげ底（脚台）状の底部から胴部にかけてなだらかに立上がり、口縁部はくの字に折れ外反気味にやや丸みがかった口縁端部となる。屈曲部の綾は鈍い。口縁内面は横方向にハケメ、胴部は縦方向にハケメを施し屈曲部下のみ部分的にナデている。同上半にススの付着がみられる。30は壺形土器で胴部最大径が中央で口縁部は緩やかに外反する。31は壺形土器の底部で平底である。32は鉢で底部と口縁は楕円形をなしプロポーションは歪である。胎土に砂粒



第12図 1号竪穴住居跡(SA01)内出土遺物実測図

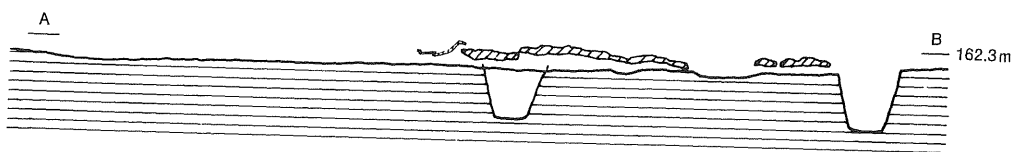


第13图 2号竖穴住居迹(SA02)遺構実測図



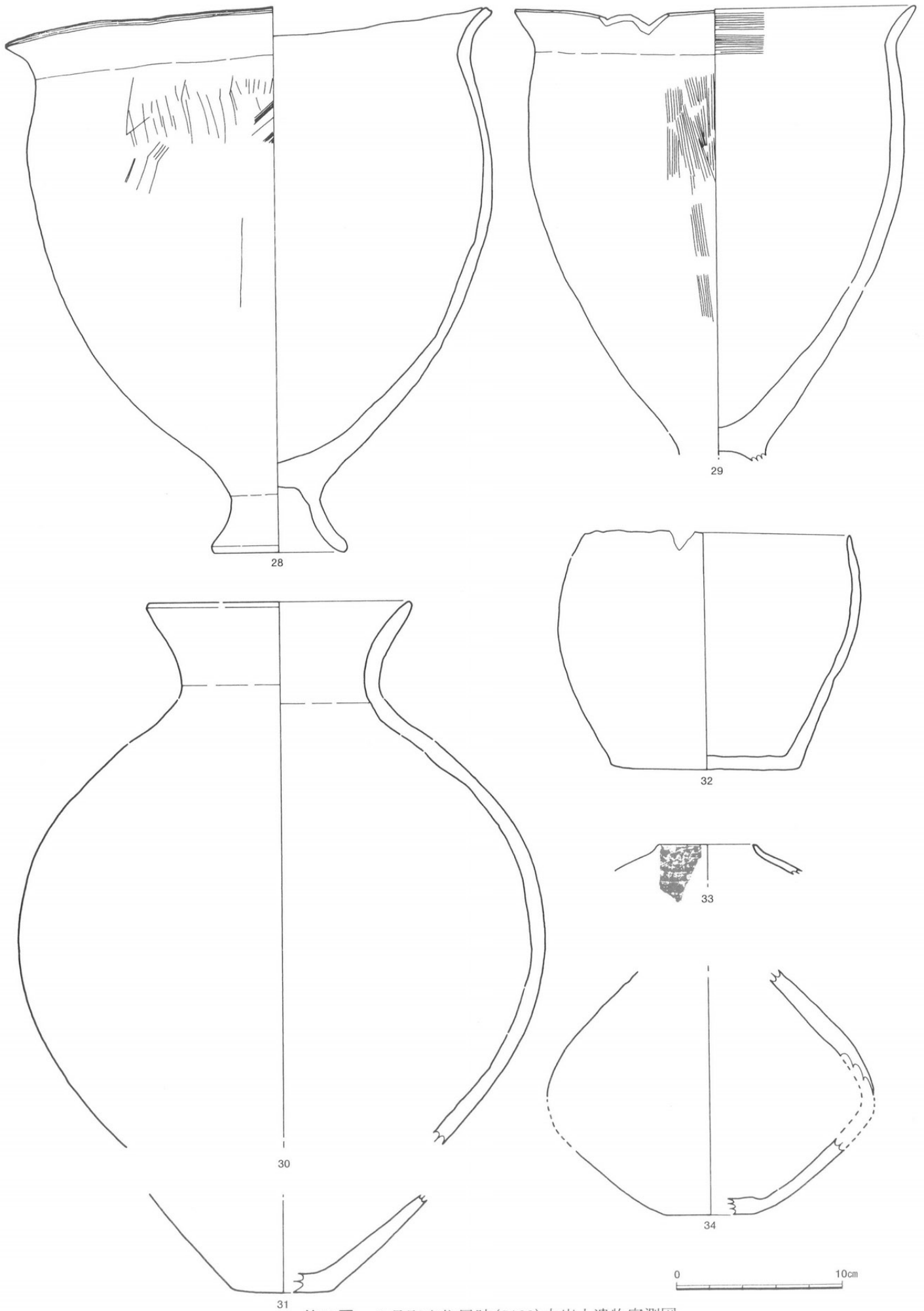
第14図 2号竪穴住居跡(SA02)内出土遺物実測図

を含み器壁は薄く脆弱である。33は無頸壺（小型）と思われるが小片のため定かではない。張った胴部から口縁部へ縮まり、口唇部はフラットで口縁に櫛描きの波状文下部に浅く羽状文を刻む。器壁は薄く焼成良く堅緻で外面にススの付着がある。34は長頸壺の胴部と思われるが疑問も残る。外面はミガキ、胎土に砂粒を含むが堅緻である。35は台石。36は頁岩製の石包丁。

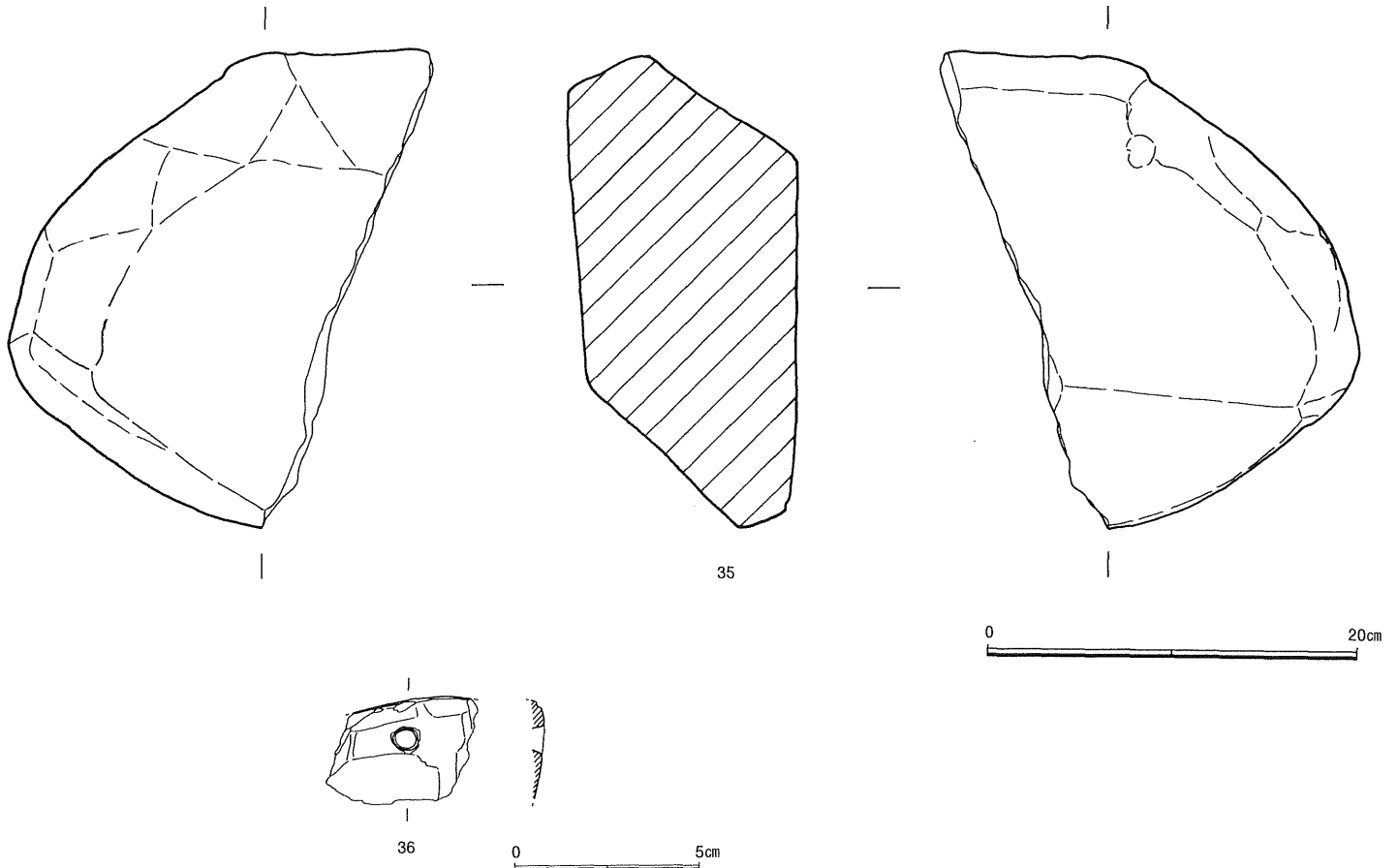


第15図 3号竪穴住居跡(SA03)遺構実測図





第16図 3号竖穴住居跡(SA03)内出土遺物実測図

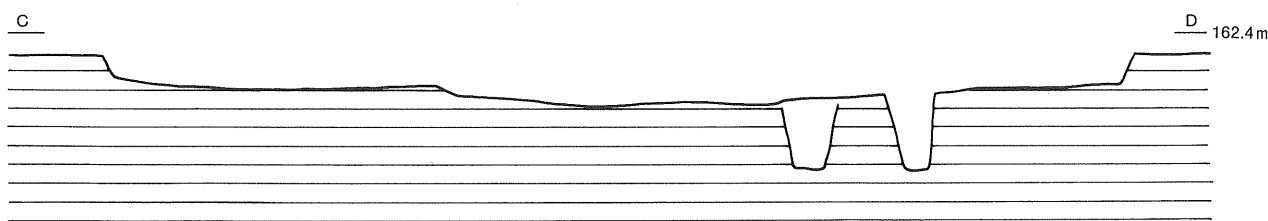
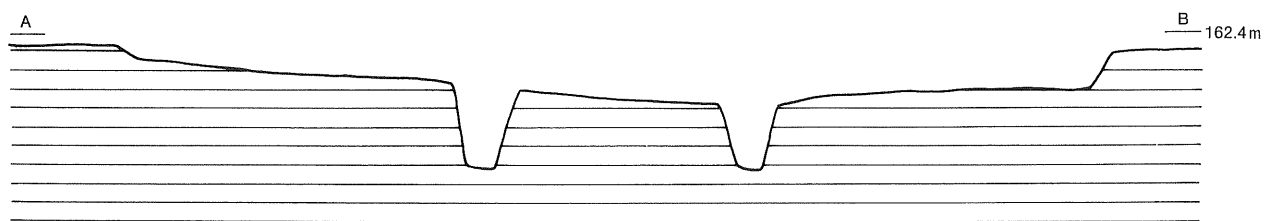
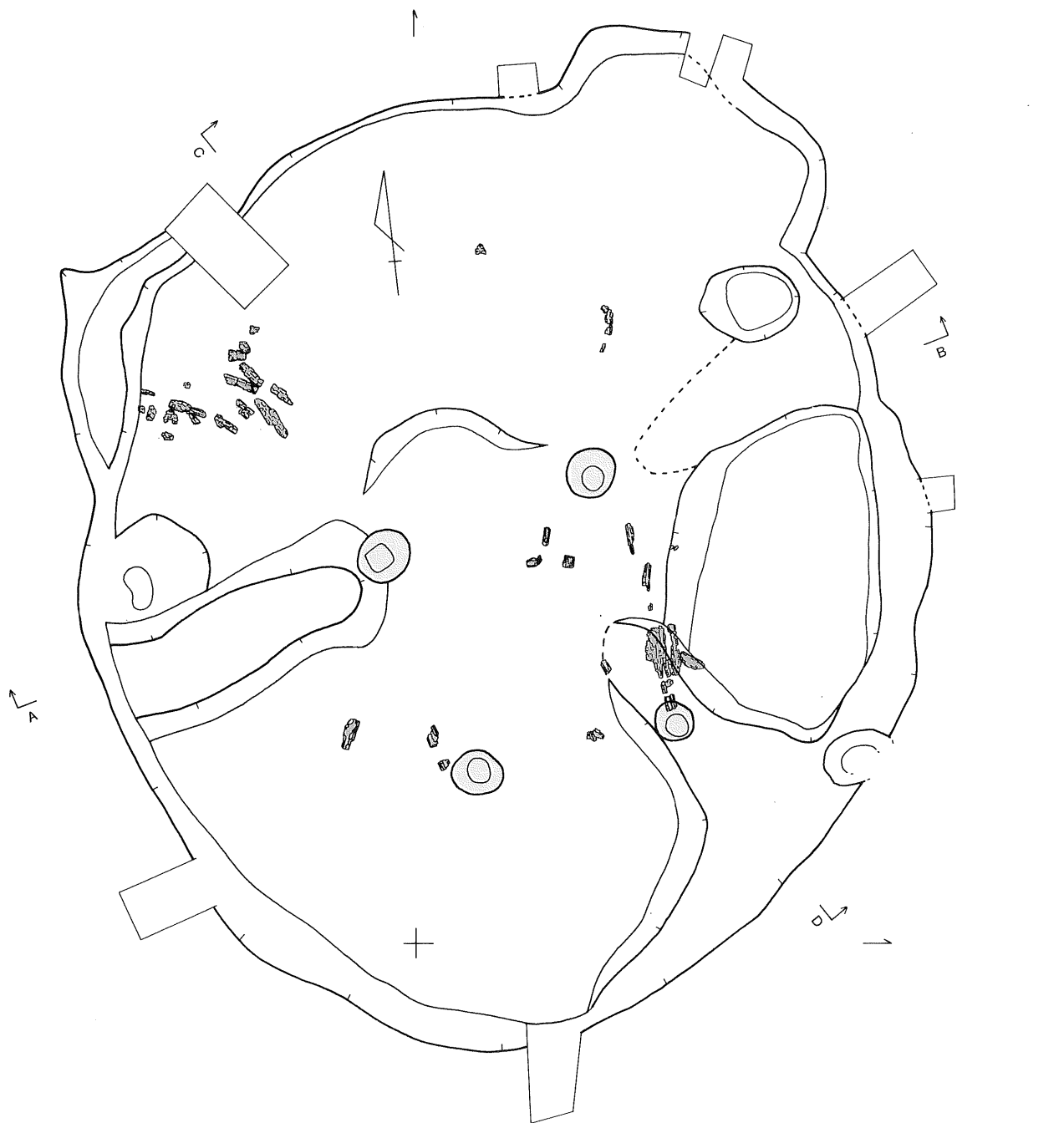


第17図 3号竪穴住居跡(SA03)内出土遺物実測図-2

4号竪穴住居跡(SA04) E-9区出土。長軸6.2m短軸5.6mの楕円形プランで、突出壁を3ヶ所4本柱の主柱穴を確認した。主柱穴はプランに対し南側にずれたかたちで位置する。南西側柱穴内から柱と思われる炭化した材(^{14}C 測定)が出土している。東及び西側に各々方形と円形の土坑をともなう。埋土は第3層黒褐色土(基本土層よりやや暗い)に御池ボラが少量含まれ下部ほどその量が増える。37・38は甕で前者は口縁部カキアゲが明瞭で、後者はカキアゲが雑で不明瞭である。口唇はフラットである。39は小型の甕と思われる。40は頁岩製の石包丁である。

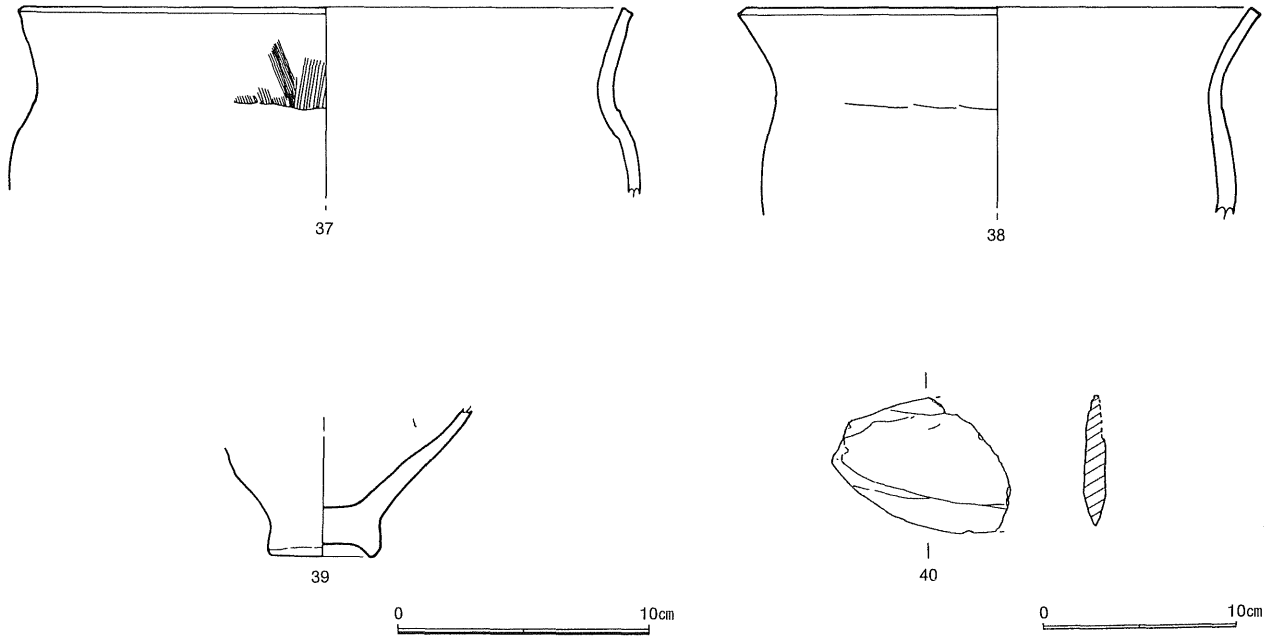
1号土坑(SC01) E-9区SA04の北側第3層にて、甕形土器が南に口縁を向け横転した状態で出土した。土坑は検出面で径0.4m円形で深さ0.36mを測る。埋土は第3層黒褐色土に細粒の御池ボラを含んでいる。甕(41)はあげ底状底部から緩やかに立上がり頸部がやや締め外反気味に口縁が延びる。口唇はフラットで、胴部最大径と口径がほぼ等しく23.5~23.9cm底径6.4~6.6cm器高28.8~29.2cmである。頸部にはカキアゲの痕跡がかすかに残る。口縁内面は横方向のハケメ外面は縦方向にハケメのちナデている。胎土に砂粒を多量に含み、同上半にはススの付着がみられる。

包含層内出土遺物 55は鉢と思われる胴部下で折れ底部は小さい平底ないし脚台付か、復元口径23.4cmを測る。56は小型鉢で中実脚台様の底部から立上がり口縁部でやや内に折れる。復元口径23.4cm底径5.5~5.9cm器高11.6~12cm、55・56とも胎土に砂粒を含むが焼成良好で堅緻である。57は壺の肩部で3条の貼付け突帯部分である。58は複合口縁壺の口縁部片で屈曲部はやや垂れ下がる。59は壺の肩部で屈曲部下に縦方向にハケメを施す。焼成良好で堅緻。60は壺の胴部で胴部最大径より上部に1条の刻目突帯を巡らす。61・62は重弧文長頸壺で、61は頸部に7条の浅い沈線を巡らせ、肩部に9本単位弧を描く。器壁は厚く焼成良好で堅緻、鈍い灰褐色を呈する。62はやや大型で頸部から肩部に沈線を巡らせ、上半の沈線間には右下がりの斜線を雑に2段に描き、下部には上向きと下向きの重弧を交互に配置する。全体に文様はラフで沈



第18図 4号竪穴住居跡(SA04)遺構実測図





第19図 4号竪穴住居跡(SA04)内出土遺物実測図

掲載遺物観察表

() 反転復元

挿図 番号	出土区 (遺構名)	種別	器種	法量 (cm)			特 徴
				口径	底径	器高	
1	G-9	縄文土器	深鉢	(30.2)	-	-	外-ミガキ 金雲母etcの鉱物を含 色調-5YR3/4暗赤褐色 内-ナデ
2	H-9	縄文土器	深鉢	-	-	-	外-ミガキ 金雲母etcの鉱物を含 色調-5YR3/4暗赤褐色 内-ナデ
3	G-8	弥生土器	甕	(31.0)	-	-	外-縦方向ハケメ 焼成良好 色調-7.5YR5/4鈍い褐色 内-ナデのち斜め工具ミガキ
4	C-8 (ST01)	弥生土器	甕	-	-	-	外-口縁横ナデ 胴部斜め方向ハケメ 砂粒含 焼成良好 スス附着 色調-10YR7/4 鈍い黄褐色 内-口縁横方向ハケメ 胴部斜め方向ハケメ 色調-10YR6/3 鈍い黄褐色
5	C-7 (ST01)	弥生土器	甕	-	-	-	外-ナデ 砂粒含 焼成良好 色調-7.5YR6/6橙色 内-ナデ
6	B-8 (ST01)	弥生土器	甕	-	-	-	外-ナデ 砂粒含 焼成良好 色調-7.5YR6/6橙色 内-ナデ
7	C-8 (ST01)	弥生土器	器台	-	-	-	外-ミガキ 横位3沈線の下上に6~7本の重弧 色調-7.5YR7/4鈍い褐色 内-ナデ
8	E-7 C-8 (ST01)	弥生土器	壺	-	-	-	外-ナデ 鉱物砂粒含 部分的にスス附着 色調-7.5YR7/4鈍い褐色 内-頸部にしぼり痕 色調-7.5YR4/1褐灰色
9	B-8 (ST01)	弥生土器	鉢	(14.0)	-	-	外-ナデ 砂粒含 色調-7.5YR6/4鈍い褐色 内-ナデ
10	C-9 D-9 C-8 (ST01)	弥生土器	甕	-	8.0	-	外-ナデ 焼成良好 色調-7.5YR4/6褐色 内-ナデ
11	C-8 (ST01)	弥生土器	壺	8.0	-	-	外-風化 砂粒含 色調-10YR6/4鈍い黄褐色 内-風化
12	C-8 (ST01)	弥生土器	壺	-	-	-	外-縦方向雑なハケメ 砂粒含 色調-10YR6/4鈍い黄褐色 内-ナデ 色調-10YR5/2灰黄褐色

線は浅い。胴部の屈曲はあまく長胴化する。63は長頸壺と思われる。器壁は薄く胎土に砂粒を含み脆弱である。64～66は高坏で65と66は同一個体ではないかと思料する。64は大型の坏部で口縁部は屈折しやや外反する。脚部（66）は脚部へ向って末広がり4ヶ所に円形の透かしをもつ。67～70は手捏ね土器である。76はホルンフェルス製の打製石斧である。

③中近世以降

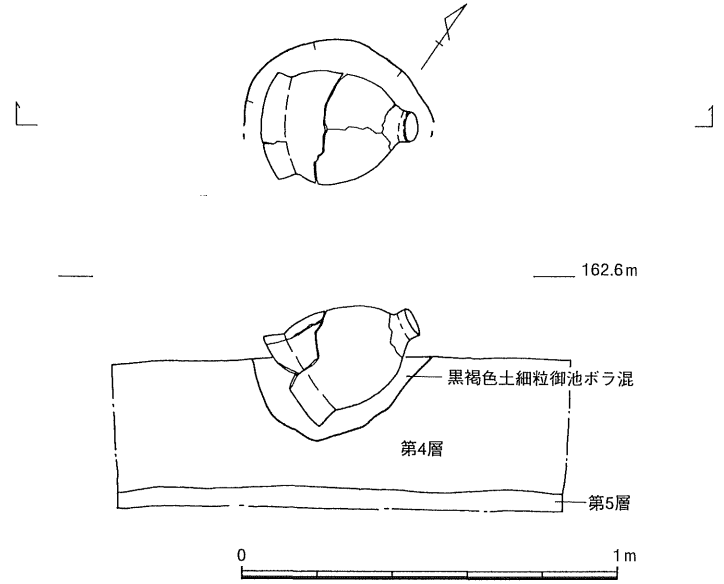
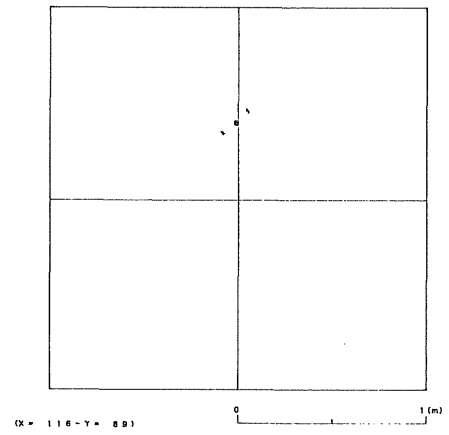
畝状遺構 D・E・F-8・9区で縞状（互層状）に堆積した白ボラと第3層黒褐色土を検出した。白ボラ部分が畝間黒褐色部分が畝山で、畝間畝山とも幅約0.3m畝の長さ5～6mほどである。

土坑 B・C-5・6区で出土。不定形で検出面よりの深度は浅く、埋土は第3層黒褐色土である。

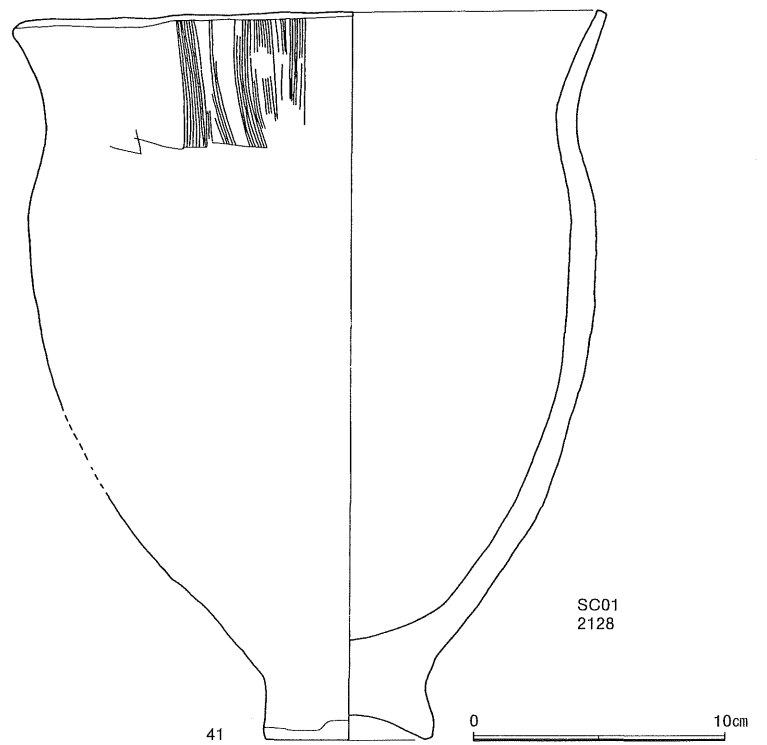
特殊土坑 B-9区、東西方向が長軸の楕円形プランで検出面2.1×1.6m、下面0.6×0.4m深さ1.3mを測る。埋土は黒褐色土で下部ほど御池ボラが多くなる。出土遺物がないため時期は不明である。

溝状遺構 都合6条の溝状遺構を確認した。近代の所産と思われる。1号溝は北よりB-6区で出現し、C-6、D-7区と略南北方向に直線的に走行しD-7区南側で東西方向に折れる。その後の走行不明。溝幅（検出面）で0.5m前後溝底0.3m深さ0.4～0.5mを測る。埋土は淡灰黒色土で下部はやや暗めである。2号溝・3号溝はF・G-5区で略南北方向に走行、埋土は灰黒色土で3号溝は2号溝に切られている。2号溝はF-5区で軽石等による廃棄的な集中箇所がみられた。4号溝はC-4・5区を東西方向に走行。埋土は灰黒色土溝幅0.6m底幅0.3m深さ0.3mである。5号溝B・C-5区で南北方向に走行、埋土は灰黒色土で溝幅0.9m底幅0.3～0.4m深さ0.5～0.6mである。3号溝に続く可能性がある。6号溝G-6区で南北方向に走行。現代まで使用された溝である。7号溝F-7区調査区東壁からL字状に北へ折れ延び、2号溝と重複する。2号溝が新しい。溝幅0.9m底幅0.3m深さ0.4mである。

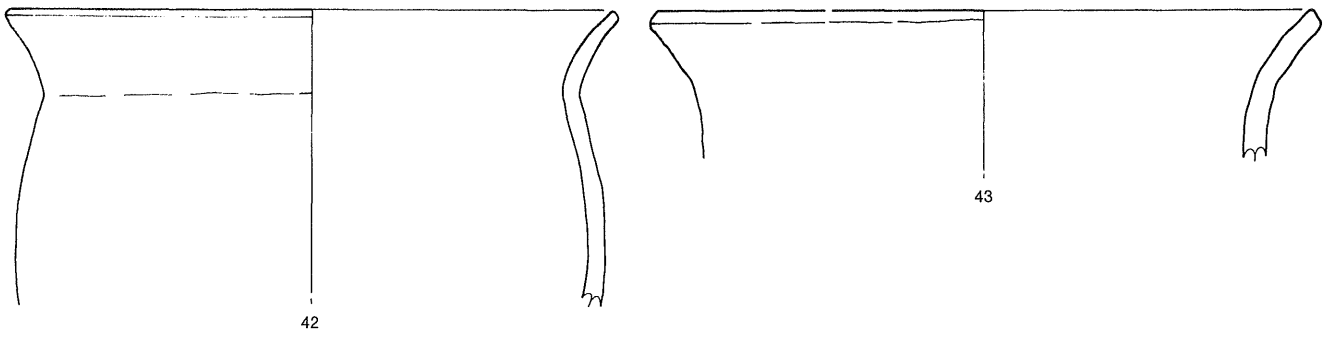
ピット 東側調査区域C・D・E・F・G-3・4区



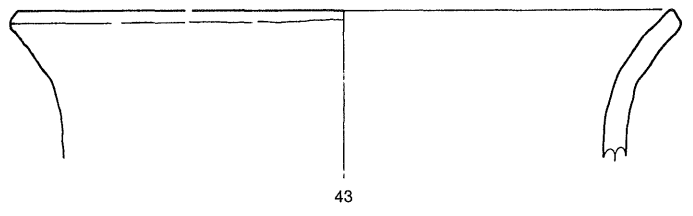
第20図 1号土坑(SC01)遺構実測図



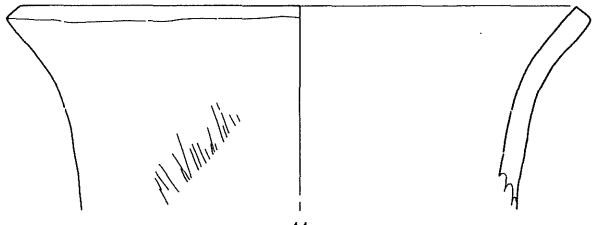
第21図 1号土坑(SC01)内出土遺物実測図



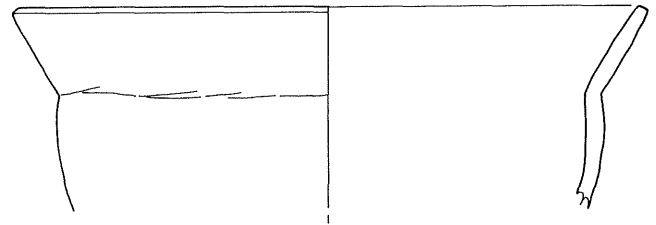
42



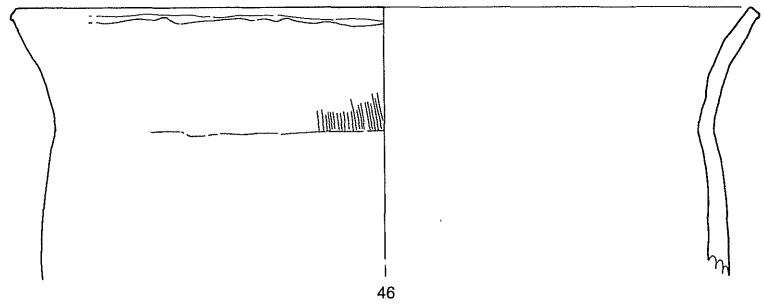
43



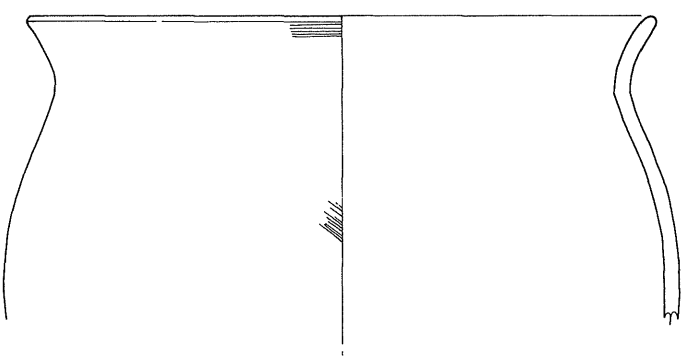
44



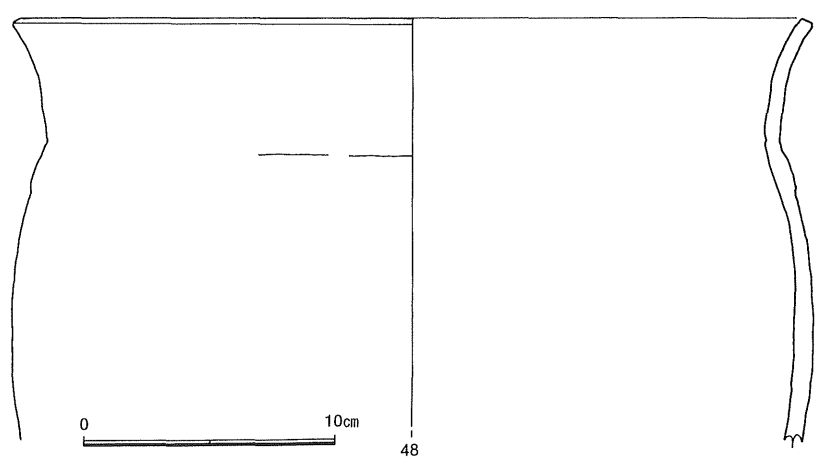
45



46



47

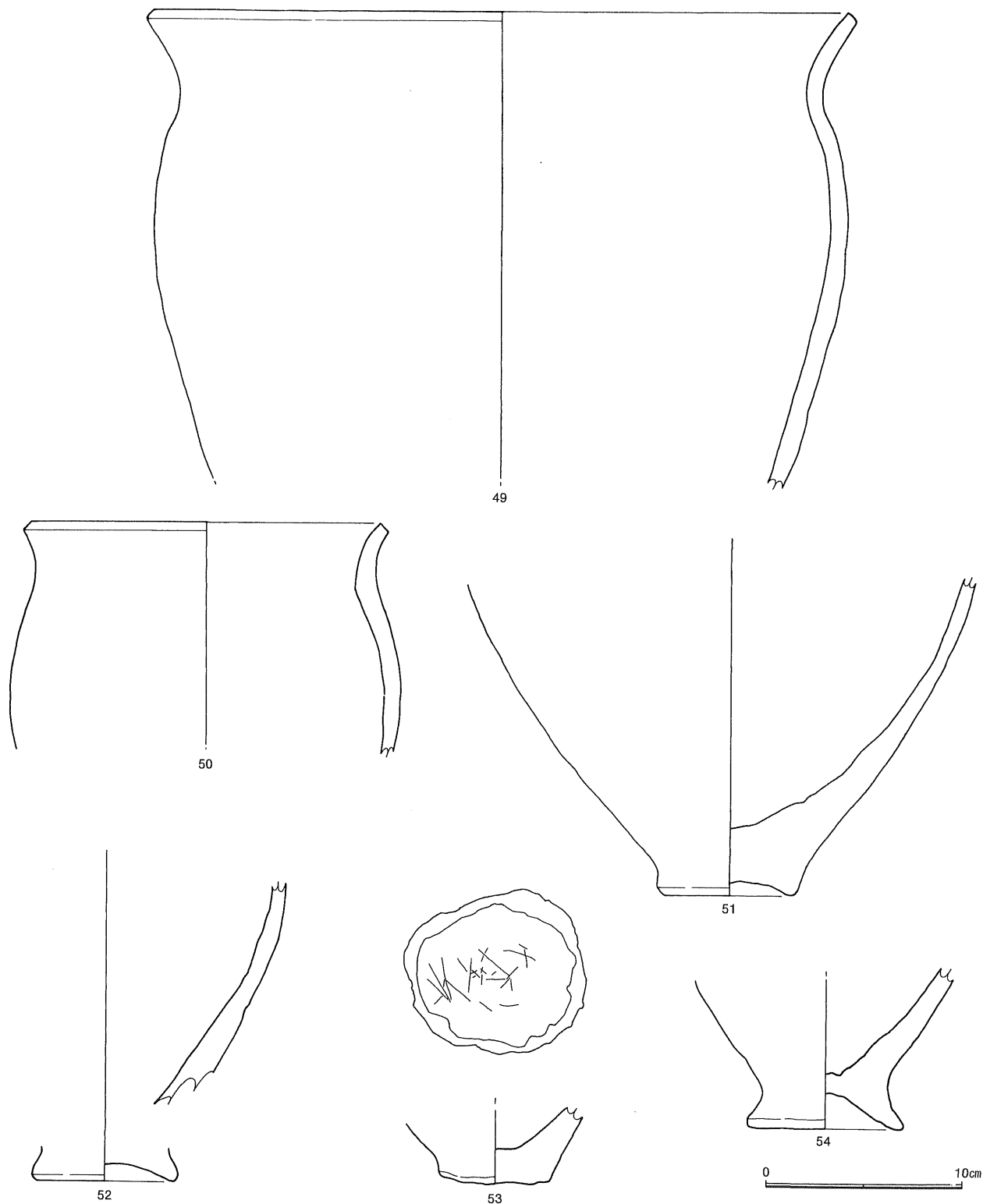


48

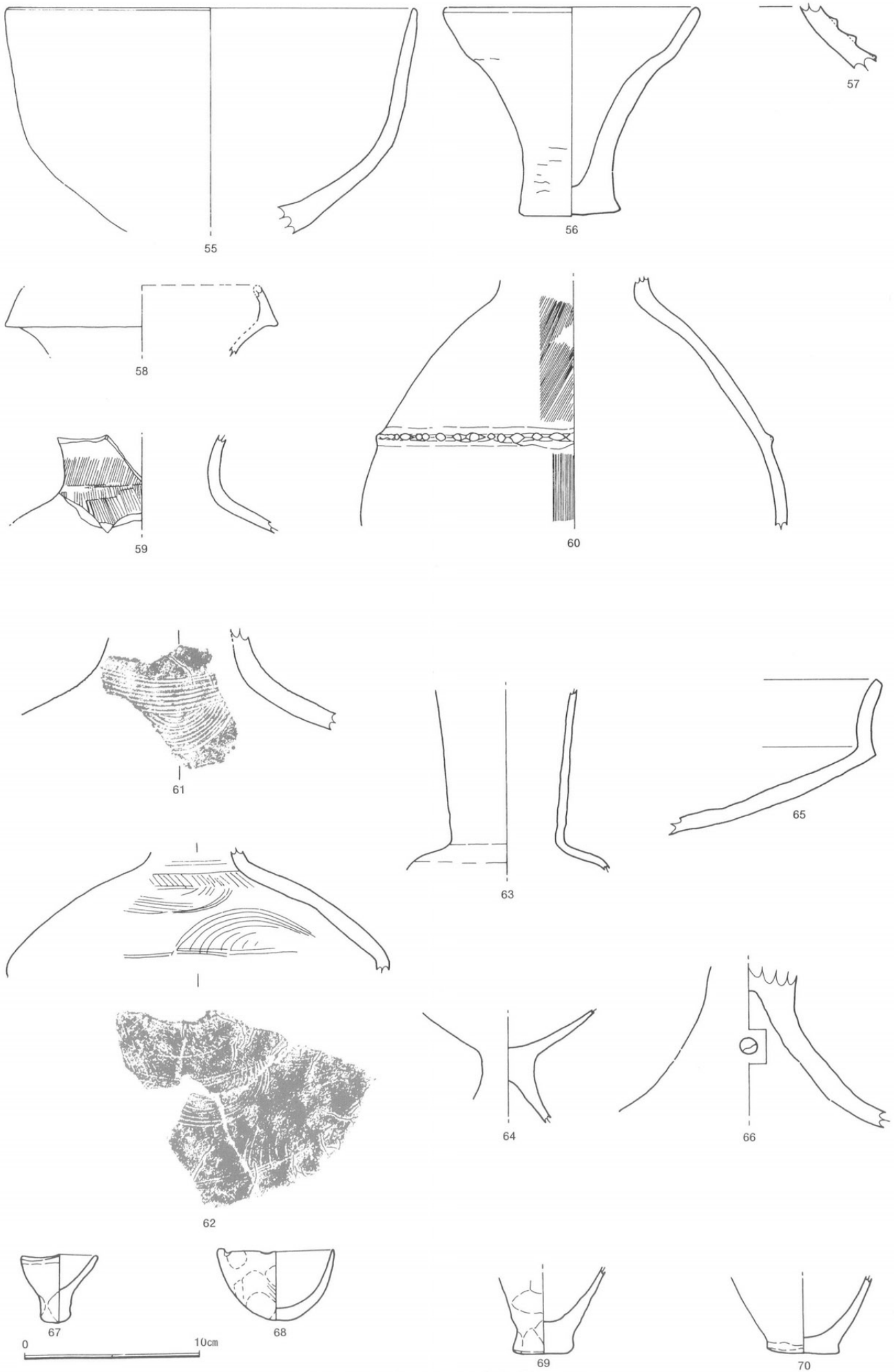
第22图 包含層内出土遺物実測図-1

で出土。埋土は第3層と第1層に分けられるが、ピットは並ばず建物の規模を確認するには至らなかった。87はF-4区ピット内出土である。

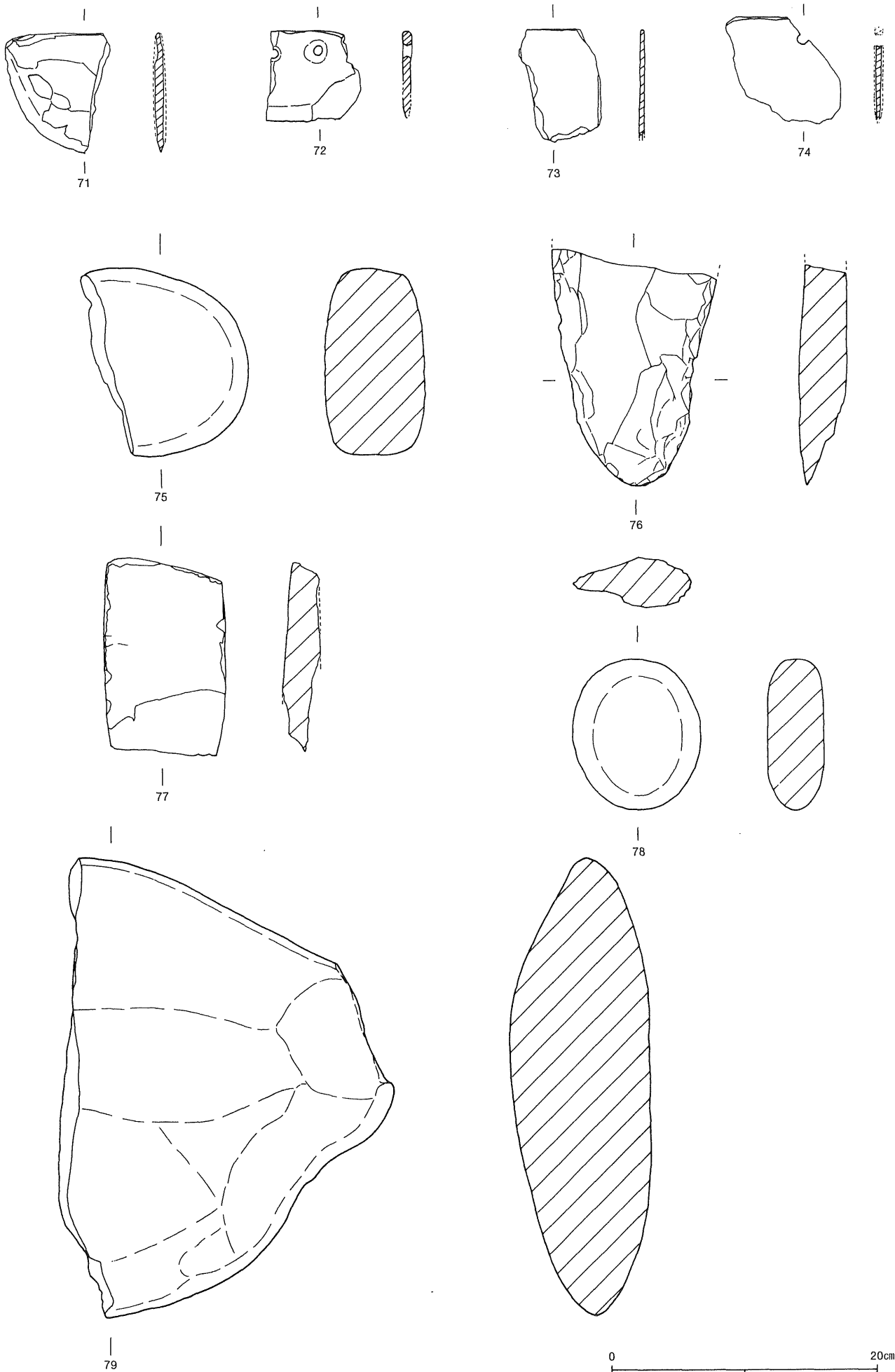
包含層内出土遺物 掲載したい遺物は溝状遺構やピット及び表層から出土したもので、溯っても18世紀以降のもので溝状遺構や近代の建物（ピット）に伴うものであろう。



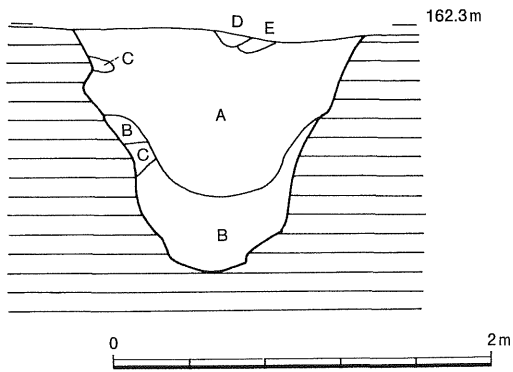
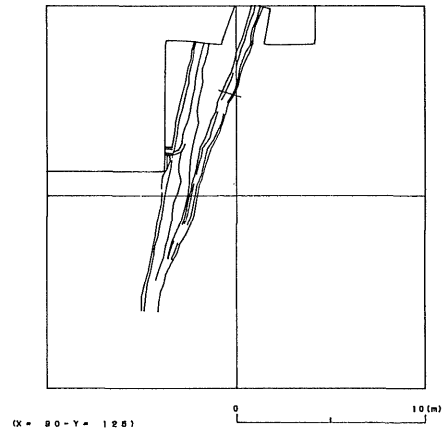
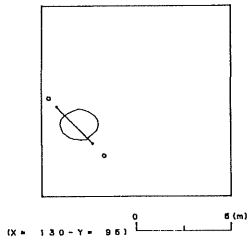
第23図 包含層内出土遺物実測図-2



第24图 包含層内出土遺物実測図-3

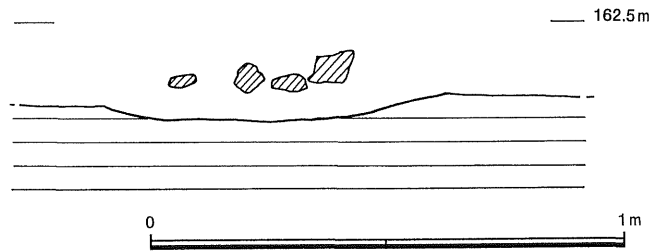


第25图 包含層内出土遺物実測図-4

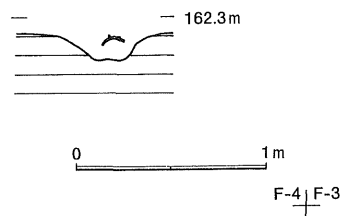
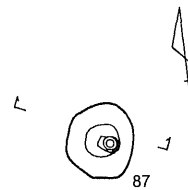


第26図 特殊土坑実測図

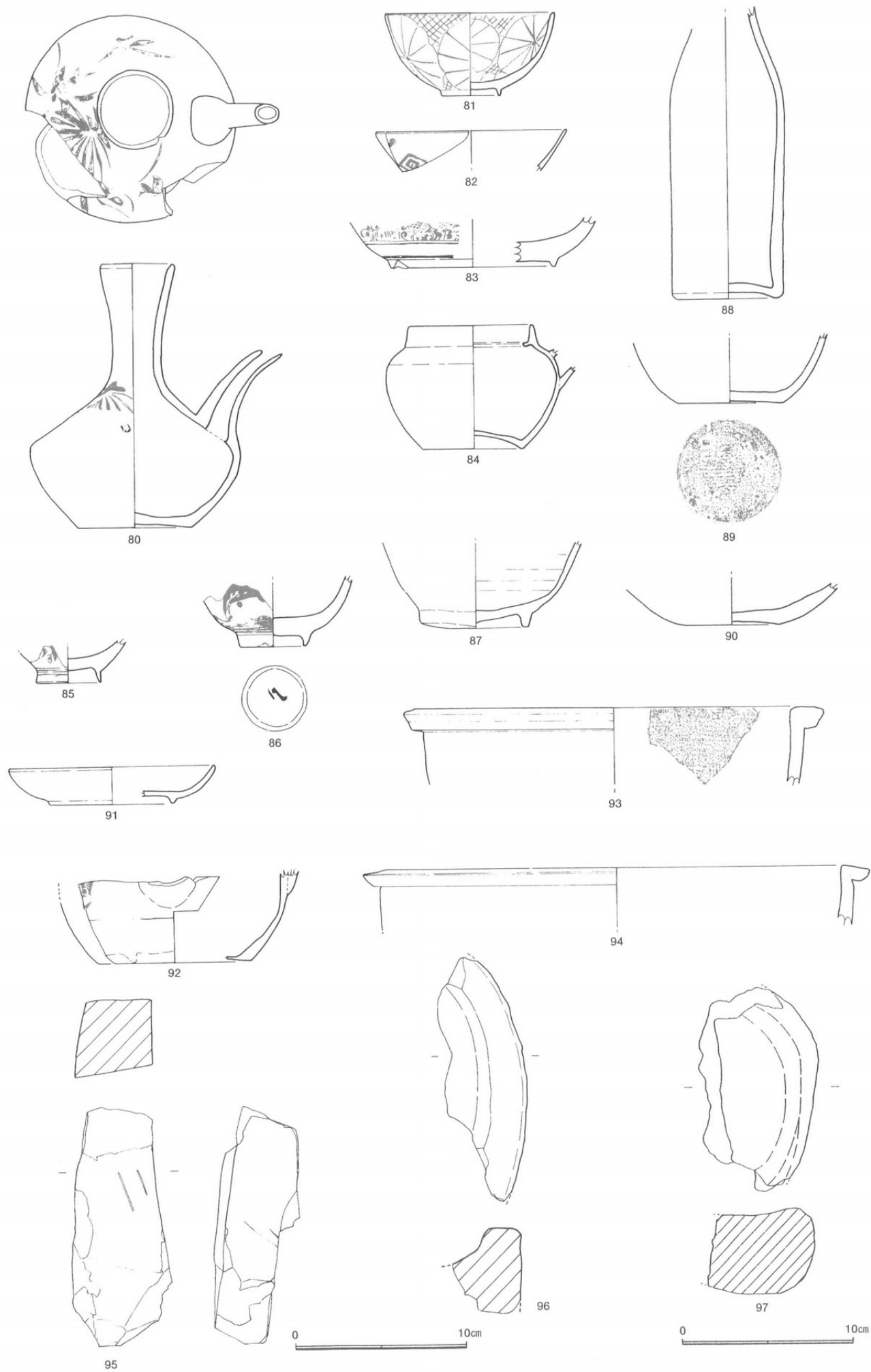
- A 黒褐色土御池ボラを少量含む
- B 黒褐色土細粒及び粗めの御池ボラを含む
- C 細粒御池ボラに黒褐色土を含む
- D 明黒褐色土に粘土を含む
- E 濃乳白色粘土



第27図 溝状遺構内出土遺物実測図



第28図 ピット内出土遺物実測図



第29図 近世以降遺物実測図

掲載遺物観察表

() 反転復元

挿図 番号	出土区 (遺構名)	種別	器種	法量 (cm)			特 徴
				口径	底径	器高	
13	C-7 (SA01)	弥生土器	甕	(22.8)	—	—	外-横ナデ 砂粒含 スス付着 焼成良好 色調-10YR7/3鈍い黄橙色 内-ナデ
14	C-8 (SA01)	弥生土器	甕	—	—	—	外-口縁カキアグのちナデ 砂粒含 色調-10YR6/3鈍い黄橙色 内-ナデ
15	C-7 (SA01)	弥生土器	甕	—	—	—	外-口縁カキアグのちナデ スス付着 色調-10YR4/2灰黄褐色 内-ナデ
16	B-7 (SA01)	弥生土器	壺	—	6.6	—	外-ナデ 砂粒含 色調-10YR6/3鈍い黄橙色 内-ナデ
17	C-7 (SA01)	土器	鉢	4.7	—	—	外-ナデ 砂粒含 色調-7.5YR7/2明褐色 内-ナデ
18	C-7 (SA01)	弥生土器	壺	—	6.8	—	外-風化 色調-2.5YR7/3鈍い黄色 内-風化
20	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	(31.4)	—	—	外-口縁丸みを帯びた段ありカキアグ 口唇フラット スス付着 砂粒含 色調-10YR7/4鈍い黄褐色 内-口縁ナデ 胴上部部分的に横方向のハケメ
21	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	—	—	—	外-カキアグ痕有 風化が著しい 砂粒含 色調-10YR8/4鈍い黄褐色 内-風化
22	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	—	—	—	外-口縁カキアグ様の段有 ナデ 砂粒含 色調-7.5YR7/4鈍い橙色 内-口縁ナデ
23	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	(19.0)	—	—	外-口縁カキアグのちナデ 砂粒含 スス付着 色調-7.5YR7/4鈍い橙色 内-ハケメのちナデ
24	E-7 (SA02)	弥生土器	壺	—	—	—	外-頸部下縦方向ハケメ 胴下部スス付着 砂粒含 器壁薄い 色調-7.5YR7/4鈍い橙色 内-ナデ 色調-7.5YR5/1褐色
25	E-7 (SA02)	弥生土器	鉢	(17.6)	—	—	外-丁寧なナデ 黒斑有り 5mm以下の砂粒含 色調-10YR7/3鈍い黄褐色 内-ナデ
26	E-7 (SA02)	弥生土器	蓋	(24.3)	7.35.9	11.5	外-ナデ 3mm以下の砂粒含 先端内外スス付着 色調-7.5YR7/3鈍い橙色 内-ナデ
28	E-6 (SA03)	弥生土器	壺	26.5 ~29.6	(8.0)	31.2 ~33.1	外-口縁横ナデ 胴上部工具ナデ スス付着 色調-7.5YR7/4鈍い橙色 内-口縁横ナデ
29	E-6 (SA03)	弥生土器	壺	24.3	—	—	外-口縁横ナデ 胴部縦方向ハケメ スス付着 色調-7.5YR7/4鈍い橙色 内-口縁横方向ハケメ 胴部ナデ
30	E-7 (SA03)	弥生土器	壺	15.8	—	—	外-口縁横ナデ 胴部ナデ 胴下部縦方向ハケメのちナデ 色調-10YR6/4鈍い黄褐色 内-口縁横ナデ 胴部ナデ
31	E-6 (SA03)	弥生土器	壺	—	6.0	—	外-部分的にミガキ、ハケメ 底部に1cm前後の竹管状の刺突 焼成良好 色調-10YR8/3浅黄橙 内-ナデ 色調-10YR6/1褐色
32	E-7 (SA03)	弥生土器	鉢	12.2 ~ ?	11.9 ~11.4	14.7 ~14.2	外-ナデ 砂粒含 器壁やや薄く脆弱 色調-2.5YR6/8橙 内-ナデ
33	E-7 (SA03)	弥生土器	無類壺	(6.0)	—	—	外-ミガキ 口唇フラット 口縁スス付着 焼成良好で堅緻 色調-2.5YR6/2灰黄 内-ナデ
34	E-6 (SA03)	弥生土器	長頸壺	—	(5.0)	—	外-ミガキ 焼成良好で堅緻 鉱物(金雲母etc)含 色調-10YR6/6明黄褐 内-ナデ 色調-7.5YR4/1黒褐
37	F-9 (SA04)	弥生土器	甕	(23.8)	—	—	外-口縁カキアグ 砂粒含 スス付着 色調-10YR6/4鈍い黄褐色 内-横方向ハケメ
38	E-9 (SA04)	弥生土器	甕	(20.0)	—	—	外-口縁カキアグ 砂粒含 スス付着 色調-10YR6/4鈍い黄褐色 内-ナデ
39	E-9 (SA04)	弥生土器	甕	—	4.2	—	外-ナデ 底部あげ底 砂粒含 色調-7.5YR7/4鈍い橙色 内-ナデ
41	E-10 SC01	弥生土器	甕	23.5 ~23.9	6.4 ~ 6.6	28.8 ~29.2	外-口縁カキアグ 胴部ナデ 底部あげ底 砂粒含 スス付着 色調-10YR6/6明黄褐色 内-口縁横方向ハケメのちナデ 胴部ナデ
42	F-7	弥生土器	甕	(24.0)	—	—	外-口縁横ナデ 胴部ナデ 砂粒含 焼成良好堅緻 色調-7.5YR6/3鈍い褐色 内-口縁横ナデ
43	D-10	弥生土器	甕	(26.0)	—	—	外-口縁横ナデ 砂粒含 スス付着 色調-7.5YR6/4鈍い褐色 内-ナデ
44	E-9 D-9	弥生土器	甕	—	—	—	外-口縁横ナデ 胴部ハケメのちナデ 口唇フラット 砂粒含 10YR7/2鈍い黄褐色 内-ハケメのちナデ
45	B-6	弥生土器	甕	(24.6)	—	—	外-口縁カキアグ 口唇フラット 砂粒含 堅緻 色調-7.5YR5/3鈍い褐色 内-ナデ
46	E-10	弥生土器	甕	(29.4)	—	—	外-口縁カキアグ 胴部ナデ 口唇フラット スス付着 砂粒含 色調-7.5YR6/3褐色 内-ハケメのちナデ
47	E-9	弥生土器	甕	(25.2)	—	—	外-横方向ハケメのちナデ 砂粒含 色調-7.5YR5/4鈍い褐色 内-ナデ
48	E-8	弥生土器	甕	(31.0)	—	—	外-口縁カキアグ痕 砂粒含 胴部スス付着 色調-10YR7/4鈍い黄褐色 内-ナデ
49	D-8 E-8 F-8	弥生土器	甕	(35.6)	—	—	外-口縁横ナデ胴部ナデ 砂粒含 口縁部分的にスス付着 色調-7.5YR6/3鈍い褐色 内-ナデ 色調-5YR3/1黒褐色
50	D-9 F-7	弥生土器	甕	(17.8)	—	—	外-口縁カキアグ様の横位圧痕有 スス付着 砂粒含 色調-10YR7/4鈍い黄褐色 内-口縁横ナデ
51	E-10	弥生土器	甕	—	6.6	—	外-胴部部分的に縦方向ハケメ底部あげ底 砂粒含 スス付着 色調-10YR7/4鈍い黄褐色 内-胴上部ハケメのちナデ

掲載遺物観察表

() 反転復元

挿図 番号	出土区 (遺構名)	種別	器種	法量 (cm)			特 徴
				口径	底径	器高	
52	5トレンチ	弥生土器	甕	—	7.0	—	外-荒いナデ 底部あげ底 砂粒含 スス付着 色調-10YR7/4鈍い黄橙色 内-工具ナデ
53	H-9	弥生土器	甕	—	—	—	外-スス付着 5YR4/1 褐灰色 内-底工具による圧痕
54	D-10	弥生土器	甕	—	8.0	—	外-ナデ 底部あげ底 砂粒含 スス付着 色調-10YR7/3鈍い黄橙色 内-ナデ
55	E-8	弥生土器	鉢	(23.4)	—	—	外-ナデ スス付着 5mm前後の砂粒を疎らに含む 色調-10YR7/3鈍い黄橙色 内-横ナデ
56	H-8,9	弥生土器	甕	14.5	5.5 ~ 5.9	11.6 ~ 12	外-ナデ 底部平底(中実高台様) 砂粒含 色調-10YR6/4鈍い黄橙色 内-ナデ
57	B-7	弥生土器	壺	—	—	—	外-現存肩部3条貼付け突帯 1mm前後の鉱物含 スス付着 色調-7.5YR7/4鈍い黄褐色 内-ナデ 色調-7.5YR7/1明褐灰色
58	B-6	弥生土器	壺	—	—	—	複合口縁壺 砂粒多量含 色調-7.5YR7/6橙色
59	G-9	弥生土器	壺	—	—	—	外-頸部カキアゲ下部縦方向ハケメ 鉱物含 堅緻 色調-10YR6/4鈍い黄褐色 内-ナデ
60	D-9,10	弥生土器	壺	—	—	—	外-胴上部に刻目突帯 縦方向ハケメ 鉱物含 色調-10R4/4赤褐色 内-ナデ
61	D-8	弥生土器	長頸壺	—	—	—	外-頸部8条沈線下部に9本単位の重弧 焼成良好堅緻 色調-7.5YR6/2灰褐色 内-ナデ 色調-7.5YR3/1黒褐色
62	E-7 F-7	弥生土器	長頸壺	—	—	—	外-重弧文etcの沈線(線彫)は浅く雑 色調-10YR6/4鈍い黄褐色 内-色調-10YR4/1褐灰色
63	E-9	弥生土器	長頸壺	—	—	—	外-ナデ 砂粒含 器壁薄い 色調-2.5YR6/8橙色 内-ナデ 色調-10Y6/1緑灰色
64	H-8	弥生土器	高杯	—	—	—	一部ハケメのちナデ 砂粒含 色調-7.5YR7/4鈍い橙色
65	E-9	弥生土器	高杯	—	—	—	66と同一個体の可能性大 表面風化著 杯部立上がり内面ミガキ 色調-2.5YR6/6橙色
66	F-9	弥生土器	高杯	—	—	—	風化著しい 脚部透穴4ヶ所
67	D-8	土器	ミガキ	4.4	1.4 ~ 1.8	4.0	手捏ね
68	E-9	土器	ミガキ	6.8	—	4.0 ~ 4.2	手捏ね
69	D-8	土器	ミガキ	—	3.4 ~ 3.8	—	手捏ね
70	D-9	土器	ミガキ	—	4.0	—	手捏ね
80	D-7 (SD01)	磁器	瓶	4.2	6.6	15.4	平佐焼?
81	D-7 (SD01)	磁器	碗	(10.0)	(3.4)	4.8	肥前 18c後半~19c前半
82	D-7 (SD01)	磁器	碗	(11.2)	—	—	型紙刷り
83	D-7 (SD01)	磁器	皿	—	(9.6)	—	型紙刷り
84	D-6 (SD01)	陶器	土瓶	7.3	5.8 ~ 5.9	7.2	
85	(SD05)	磁器	碗	—	3.6	—	
86	(SD04)	磁器	碗	—	3.8	—	波佐見 18c代 雪野梅樹文 高台内大明年製のくずれ
87	F-4 p i t 02	磁器	瓶	—	6.5 ~ 6.7	—	肥前系 18c後半~19c前半
88	D-7 (SD01)	ガラス	瓶	—	5.9	—	グリーン
89	G-5 (SD02)	磁器	鉢	—	6.2	—	型紙刷り 明治~大正
90	G-5 (SD02)	陶器	土瓶	—	5.5	—	薩摩
91	C-5 (SD05)	磁器	皿	(11.8)	(7.2)	2.2	瀬戸系 銅版刷り 大正~昭和
92	B-5 (SD05)	磁器	土瓶	—	(9.0)	—	平佐焼?
93	D-7 (SD01)	陶器	ナリ鉢	外-24.6 内-20.6	—	—	薩摩
94	B-5 (SD05)	陶器	甕	外-29.6 内-26.4	—	—	薩摩

3. 大久保第2遺跡の自然科学分析

株式会社 古環境研究所

1. 大久保第2遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、霧島火山や桜島火山などから噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層が認められた大久保第2遺跡においても、地質調査を行って土層の記載を行うとともに、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を行い、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は基本土層断面である。

2. 基本土層断面の土層層序

基本土層断面では、下位より黒灰褐色土（層厚27cm）、黄色軽石層（層厚4cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径2mm）、下位の黄色軽石層に由来する軽石を含み若干色調の暗い灰色土（層厚17cm、軽石の最大径7mm）、白色細粒火山灰層（層厚2cm）、砂混じりで若干色調の暗い灰色土（層厚16cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚5cm）、砂混じりで若干色調の暗い灰色土（層厚33cm）、砂混じり暗灰色土（層厚56cm）が認められた（図1）。

3. テフラ検出分析

（1）分析試料と分析方法

土層観察の際に肉眼観察により検出できないテフラの有無を確かめるために、テフラ検出分析を行った。分析の対象となった試料は、基本的に5cmおきに採取された試料のうち、5cmおきの3点である。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料番号11には、あまり発泡のよくない灰色軽石（最大径1.6mm）のほかに、暗褐色や黒褐色のスコリア（最大径1.1mm）が比較的多く含まれている。とくにスコリアについては、その岩相から10～13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア（Kr-ThS, 井ノ上, 1988, 早田, 1997）に由来すると考えられる。

試料番号7には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.4mm）が比較的多く含まれている。軽石の班晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その岩相から、1471（文明3）年に桜島火山から噴出したと考えられている桜島3テフラ（Sz-3, 小林, 1986, 町田・新井, 1992, 後述）に同定される可能性が大きい。

試料番号3には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.9mm）のほかに、よく発泡した白色軽石（最大径1.2mm）が比較的多く含まれている。軽石の班晶には、いずれも斜方輝石や単斜輝石が認められる。前者は、その岩相からSz-3に由来すると考えられる。一方、後者については、1914（大正）に桜島火山から噴出した桜島1テフラ（Sz-1, 小林, 1986, 町田・新井, 1992, 後述）に由来すると考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ層の可能性が非常に高い試料番号9、5、1の3層について、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みた。測定は、温度一定型位相差法（新井, 1972）による。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表1に示す。試料番号9には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径5mm）が多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。火山ガラス（ n ）と斜方輝石（ γ ）の屈折率は、各々1.510-1.516と1.710-1.714である。このテフラ層は、軽石の特徴や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率から、Sz-3に同定される。

試料番号5には、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.4mm）が比較的多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。火山ガラス（ n ）と斜方輝石（ γ ）の屈折率は、各々1.511-1.516と1.705-1.713である。このテフラ層は、軽石の特徴や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率から、Sz-1に同定される。

また、試料番号1にも、比較的よく発泡した灰色軽石（最大径2.1mm）が比較的多く含まれている。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。火山ガラス（ n ）と斜方輝石（ γ ）の屈折率は、各々1.511-1.516および1.710-1.733である。このテフラ層に含まれる軽石や斜方輝石の多くは、桜島火山起源のテ

テフラに由来していると考えられるものの、斜方輝石の一部には、約2.4~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良入戸火砕流堆積物（A-Ito, 荒牧, 1969, 町田・新井, 1992）や始良Tn火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995）に由来すると考えられる屈折率の高いものも含まれている。さらに火山ガラスとして、約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界カカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井, 1978）に由来する淡褐色バブル型ガラスも含まれている。これらのことから、試料番号1については、テフラの二次堆積層の可能性が考えられよう。

5. 小結

大久保第2遺跡の基本土層断面について、地質調査と屈折率測定を行った。その結果、下位より桜島3テフラ（Sz-3, 1471年）と桜島1テフラ（Sz-1, 1914年）を認めることができた。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p. 254-269.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による 14C年代。第四紀研究, 34, p. 377-379.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史。岩鉱, 83, p. 26-41.

小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流。文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者 荒牧 重雄）, p. 137-163.

町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p. 339-347.

町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p. 143-163.

町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）始良Tn火山灰（AT）の14C年代。第四紀研究, 26, p. 79-83.

早田 勉（1997）火山灰と土壌の形成。宮崎県史通史編1, p. 33-77.

表1 大久保第2遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料			軽石・スコリア	
	量	色調	最大径		
基本土層断面	3	++	灰>白	2.9, 1.2	
	7	++	灰	2.4	
	11	++	灰>暗褐, 黒褐	1.6, 1.1, 1.1	

++++ : とくに多い, +++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない, - : 認められない. 最大径の単位は, mm.

表2 大久保第2遺跡基本土層断面の屈折率測定結果

試料	重鉱物	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
1	opx>cpx	1.511-1.516	1.710-1.733
5	opx>cpx	1.511-1.516	1.705-1.713
9	opx>cpx	1.510-1.516	1.710-1.714

opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石. 屈折率の測定は温度一定型位相差法 (新井, 1972) による。

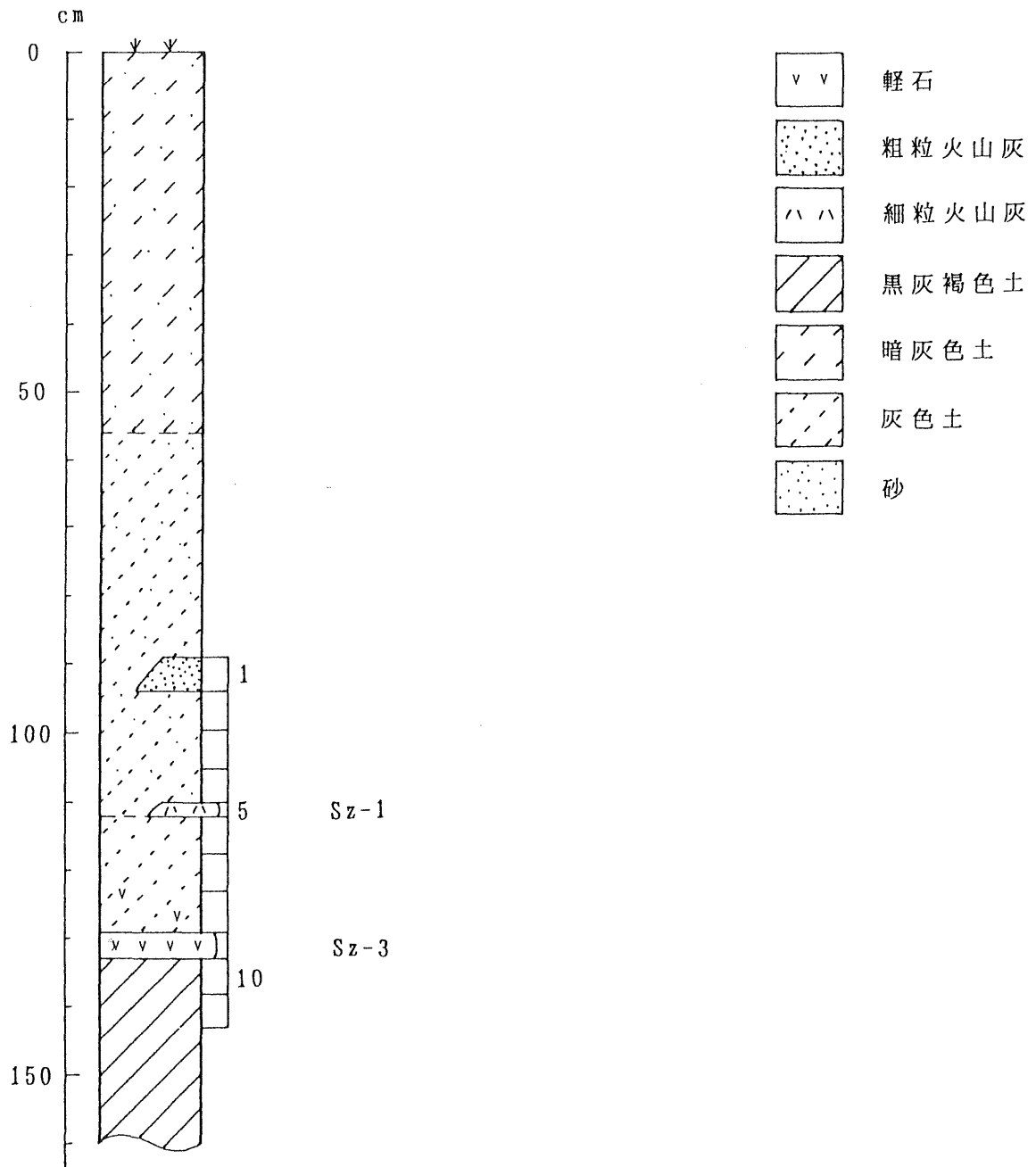


図1 大久保第2遺跡の基本土層柱状図（数字はテフラ分析の試料番号）

II. 大久保第2遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	SA01	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法
No. 2	SA02	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法
No. 3	SA03	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法
No. 4	SA04	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法

2. 測定結果

試料名	14C年代 (年BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正14C年代 (年BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定No. (Beta-)
No. 1	1790 \pm 50	-25.4	1780 \pm 50	AD245 (AD220~340)	117684
No. 2	1820 \pm 60	-24.8	1830 \pm 60	AD220 (AD120~250)	117685
No. 3	1950 \pm 40	-25.5	1940 \pm 40	AD75 (AD45~110)	117686
No. 4	1940 \pm 60	-26.3	1920 \pm 60	AD90 (AD45~145)	117687

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前（BP）かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（ ‰ ）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年BPより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ 値が表記される場合もある。

Ⅲ. 大久保第2遺跡出土炭化材の樹種同定

1. 試料

試料は、SA01～SA04から出土した5点の炭化材である。

2. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

同定結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表1 大久保第2遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料	樹種 (和名/学名)
SA01 C	イヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch
SA02 1728	エゴノキ属 <i>Styrax</i>
SA02 1863	イヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch
SA03	イヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch
SA04 Pit 1	イヌガヤ <i>Cephalotaxus harringtonia</i> K. Koch

a. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 図版1・2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高ぐらいである。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10～15m、径20～30cmである。材はやや堅硬で、木理は緻密であるが、不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する半環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

4. 所見

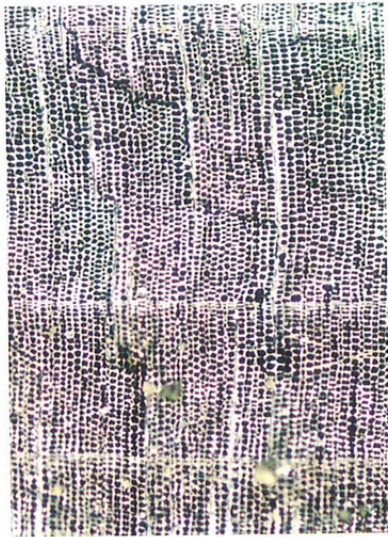
SA01～SA04から出土した炭化材は、イヌガヤとエゴノキ属であった。イヌガヤはやや暖かい山地ないし平地の林内に生育し、エゴノキ属は谷沿いや河辺に生育する樹木である。

参考文献

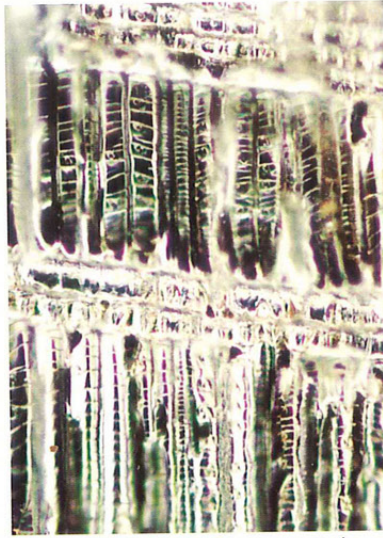
佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.

大久保第2遺跡出土炭化材の顕微鏡写真



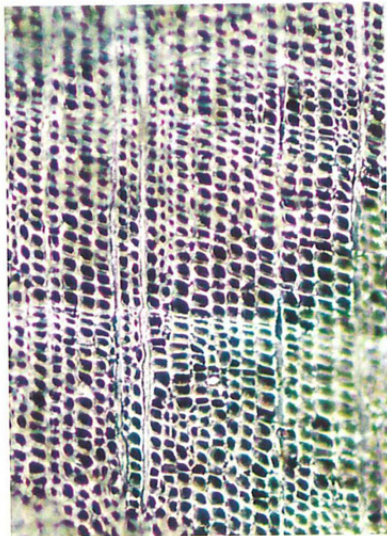
横断面 ————— :0.4mm
1. SA01 C イヌガヤ



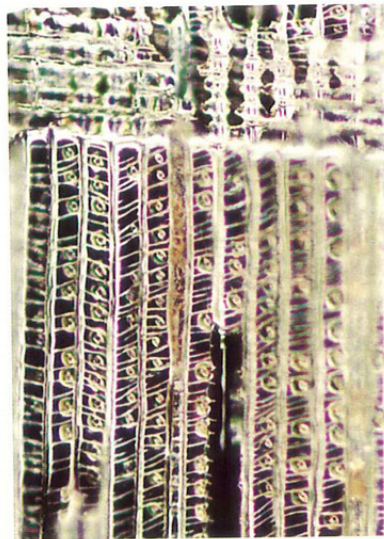
放射断面 ————— :0.1mm



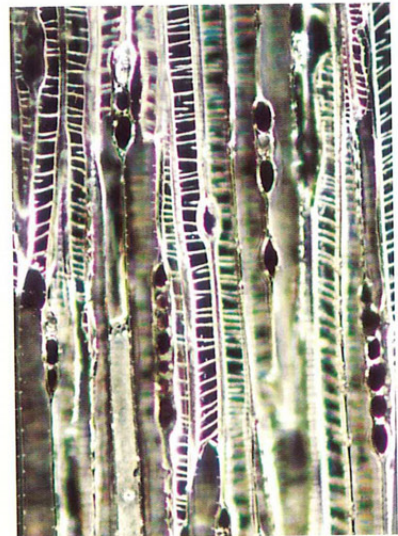
接線断面 ————— :0.2mm



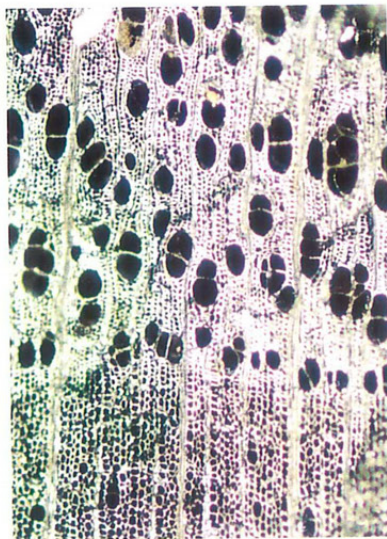
横断面 ————— :0.2mm
2. SA03 イヌガヤ



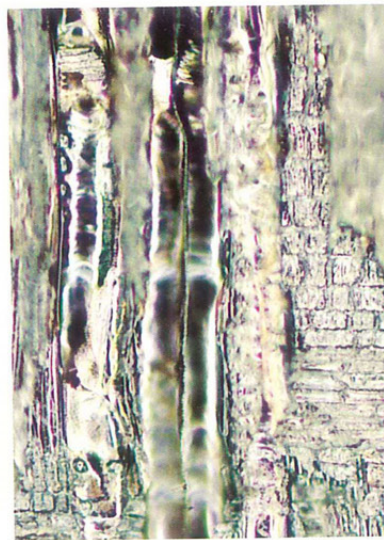
放射断面 ————— :0.1mm



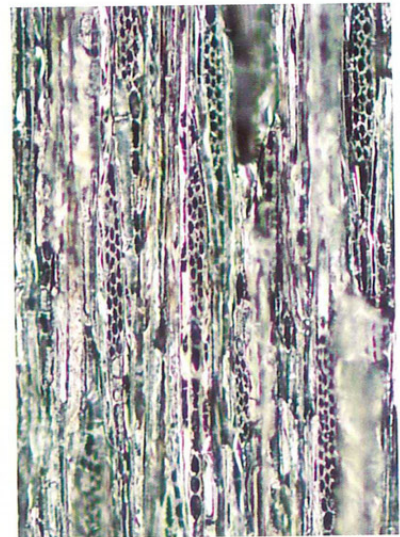
接線断面 ————— :0.1mm



横断面 ————— :0.4mm
3. SA02 1728 エゴノキ属



放射断面 ————— :0.2mm



接線断面 ————— :0.2mm

遺跡地名表(弥生後期～古墳初頭)

番号	遺跡名	所在地	遺構	内 訳 (m・本)															
				周溝状遺構	平面形態	内郭の遺構	円形花弁型	突出壁数	主柱穴数	方形花弁型	突出壁数	主柱穴数	円形(突出壁なし)	主柱穴数	方形(突出壁なし)	主柱穴数			
1	大久保第2	乙房町	周溝状遺構1	7×7	方形	なし													
			竪穴住居4																
			SA01											5.2×5.0	2				
			SA02										4.4×3.6	2	2				
			SA03									7×7?	2+α	2+α					
			SA04				6.2×5.6	3	4										
2	加治屋第1	南横市	周溝状遺構1	1	不明														
			竪穴住居5																
			1										1	2					
			2													1/2	-		
			3													1			
			4									1/2	-						
			5									1/2	-						
3	岩立	五十町	竪穴住居4																
4	柳川原	中町	竪穴住居1																
5	年見川	早水町	周溝状遺構1	4.8×3.6	方形	住居跡と考えている													
			竪穴住居2																
			2号														4.3×4.3	-	
			3号																
			3号																
6	向原第1	立野町	周溝状遺構8																
			竪穴住居4																
7	牟田ノ上	早水町	周溝状遺構2																
			竪穴住居9																
8	池ノ友(第1次)	早水町	周溝状遺構6																
			竪穴住居12																
9	祝吉第1	祝吉町	竪穴住居7																
			Y-1																
			Y-2																
			Y-3																
			Y-4																
			Y-5																
			Y-6																
	Y-7																		
		祝吉第2	祝吉町	竪穴住居13															
	Y-2																		
	Y-3																		
	Y-4																		
	Y-5																		
Y-6																			
Y-7																			
			Y-8																
			Y-9																
			Y-10																
			Y-11																
			Y-12																
			Y-13																
10	中大五郎第1	丸谷町	周溝状遺構3																
			SL1	1	不明														
			SL2	2.8×α	方形	ビット													
			SL3	3.3×3.0	円形	ビット													
			竪穴住居7																
			SA1																
			SA2																
			SA3																
SA4																			
SA5																			
SA6																			
SA7																			
			SA7																

番号	遺跡名	所在地	遺構	内 訳 (m・本)														
				周溝状遺構	平面形態	内郭の遺構	円形花弁型	突出壁数	主柱穴数	方形花弁型	突出壁数	主柱穴数	円形(突出壁なし)	主柱穴数	方形(突出壁なし)	主柱穴数		
	中大五郎第2	丸谷町	周溝状遺構3															
			SL1	3.0×2.6	方形	ピット												
			SL2	3.8×3.7	方形	なし												
			SL3	2.8×2.8	方形	なし												
			竪穴住居6															
			SA1														6.8×4.5	2
			SA2														6.0×4.5	2
			SA3				9.3×9	9	5									
			SA4														4.25×3.87	2
			SA5							5.45×3.8	1+α	1+α						
			SA6														5.5×4	2
11	前畑	丸谷町	竪穴住居25															
			SA2														4.4×4.4	4
			SA4							8.2×7.2	8	4						
			SA5														6×6	2+α
			SA6														7×7	4
			SA7										6.6×6.6	4				
			SA8							7.8×6.4	3	2						
			SA9														7.4×7.4	4
			SA11							7.4×α	4+α	4						
			SA12							7.2×α	4+α	4						
			SA13														5.5×5.2	4
			SA14							7.4×6.8	5	2or4or6						
			SA15				7.6×7.0	2	5									
			SA16														4.4×3.8	4
			SA18														3.25×2.8	2
			SA19							8.2×8.2	7	4						
			SA20														3.8×3.5	—
			SA21														4.0×3.6	2
			SA22														4.8×4.8	2
			SA24														4.6×3.6	1+α
			SA25							1/2	6+α	5						
			SA26							5.6×5.0	2	4+α						
			SA27							6.0×6.0	4	4						
			SA28														1?	
			SA29														3.7×3.1	?
			SA40							5.6×4.3	1	2						
12	丸谷第1	丸谷町	竪穴住居2															
			1号							7.05×7.05	3	4						
			2号							9.87×9.2	2	7						

表の見方

分数表記 - 住居跡の発掘割合を表す

一覧表出典

『加治屋遺跡2』 「都城市文化財調査報告書第35集」 1996年

『年見川遺跡』 「宮崎県史 資料編 考古1」

『祝吉遺跡』 「都城市文化財調査報告書第1集」 1981年

『祝吉遺跡』 「都城市文化財調査報告書第2集」 1982年

『丸谷地区遺跡郡』 「都城市文化財調査報告書第34集」 1996年

『丸谷第1遺跡』 「九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」 1979年

柳川原遺跡 横山哲英氏ご教示

岩立遺跡・向原第1遺跡・牟田ノ上遺跡・池ノ友(第1次)遺跡 柴畑光博氏ご教示



発掘調査区域全景(南より)



発掘調査区域全景(真上より)



S T01, S A01・02・03・04(真上より)



3号溝状遺構内遺物出土状況



特殊土坑半サイ状況(南より)



同完掘状況(南より)



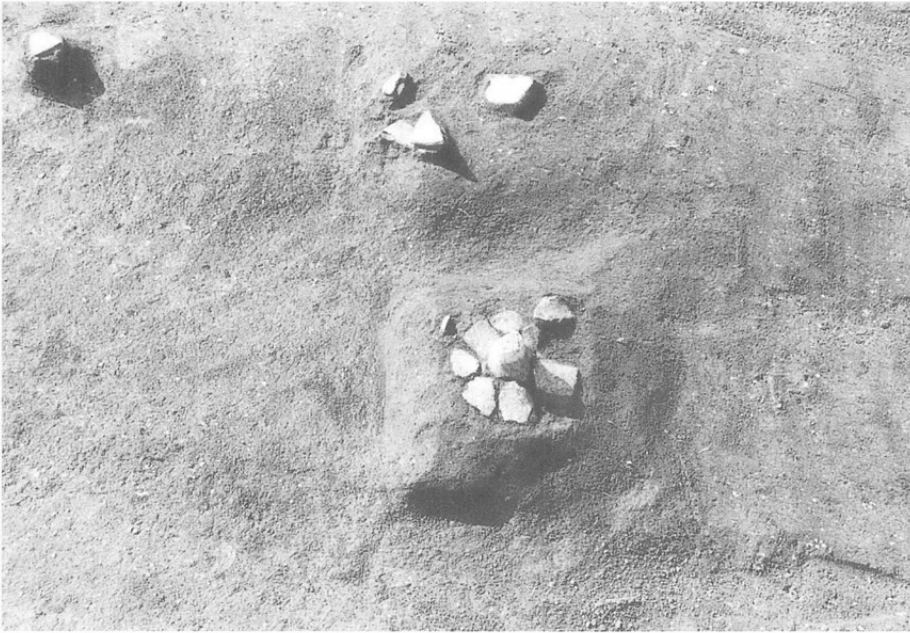
畝状遺構検出状況(東より)



畝状遺構検出状況(南より)



1号溝状遺構土層断面(南より)



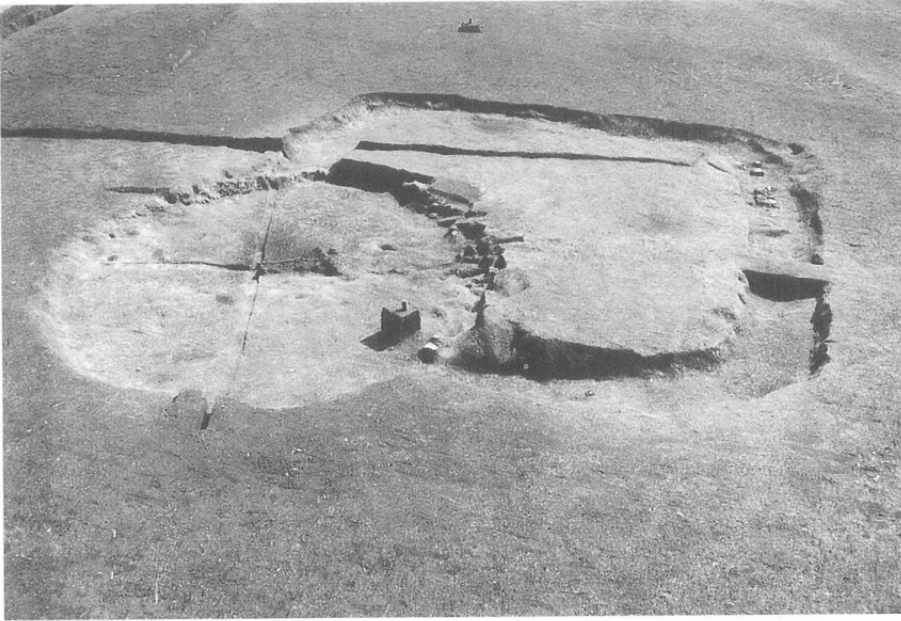
高坏脚部出土状況



1号土坑検出状況(東より)



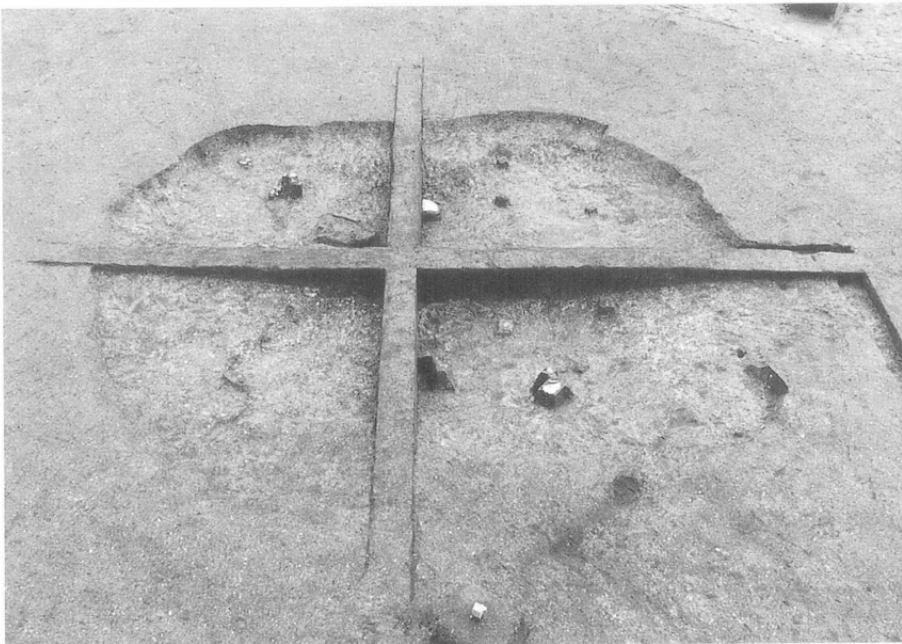
同タチワリ状況(東より)



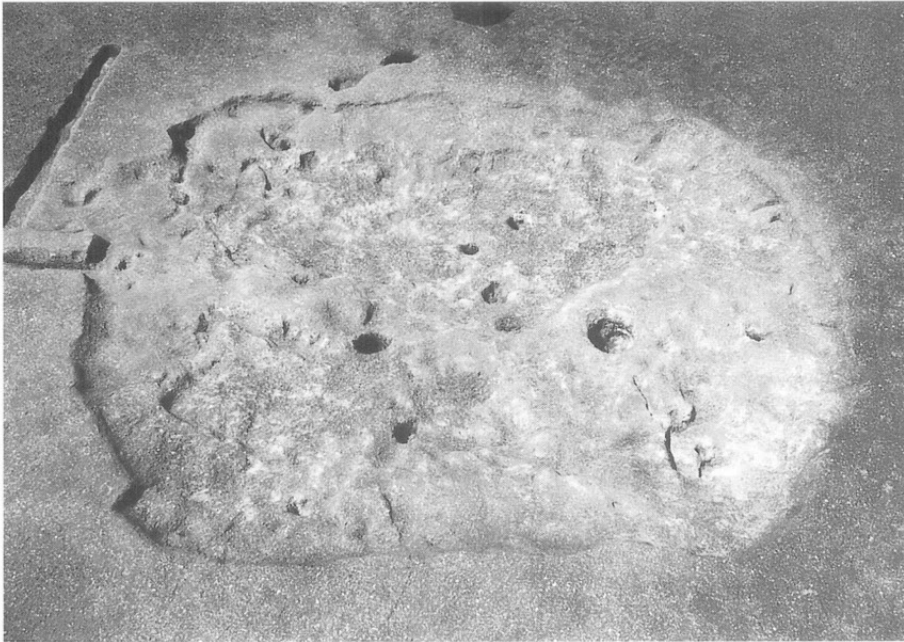
周溝状遺構及び
1号竪穴住居跡精査(北より)



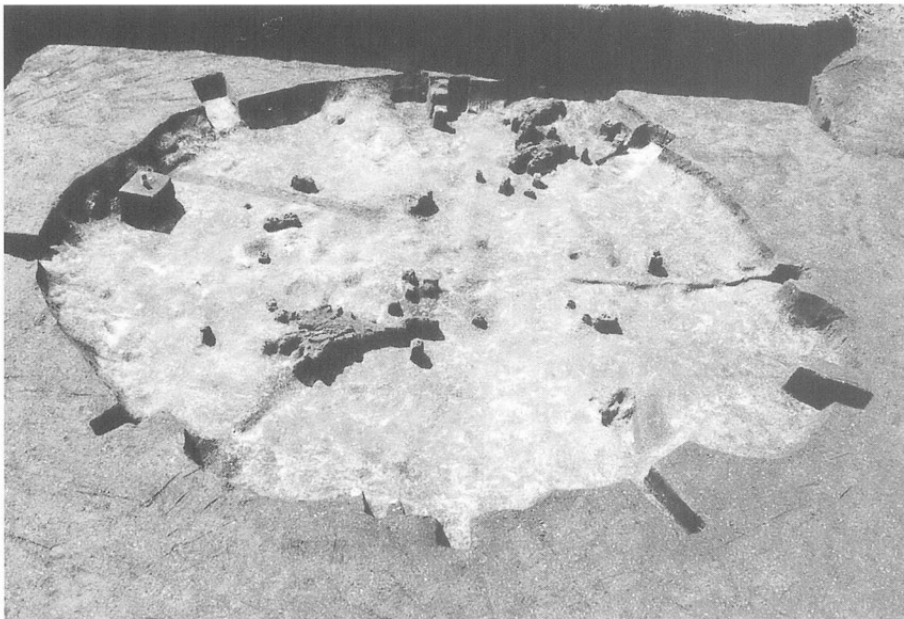
同完掘状況(北より)



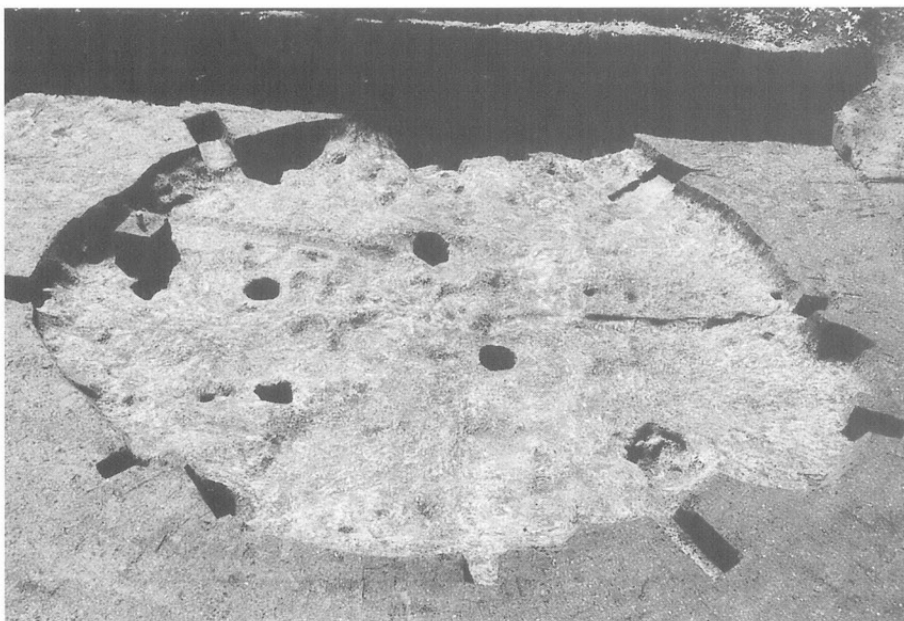
2号竪穴住居跡遺物出土(北より)



2号竪穴住居跡完掘状況(南より)



4号竪穴住居跡遺物出土状況
(東より)



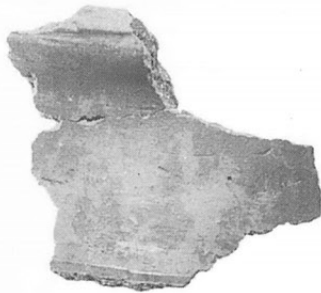
4号竪穴住居跡完掘(東より)



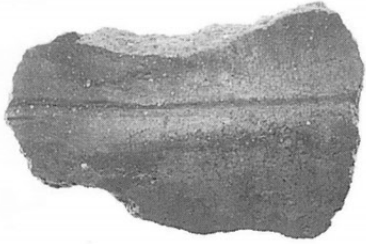
3号竖穴住居跡遺物出土状況
(南より)



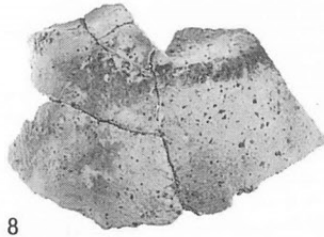
3号竖穴住居跡完掘状況(西より)



1



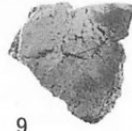
2



8



6



9



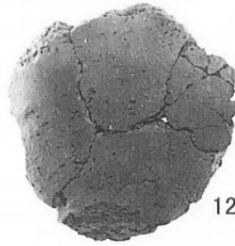
7



5



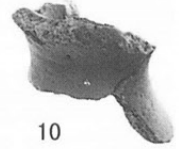
4



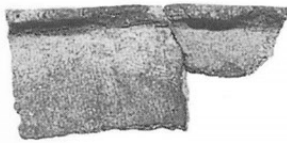
12



11



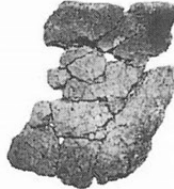
10



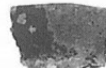
3



17



14



15



13



16



18



19



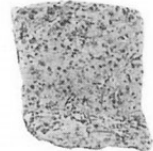
33



20



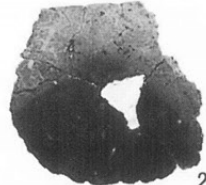
22



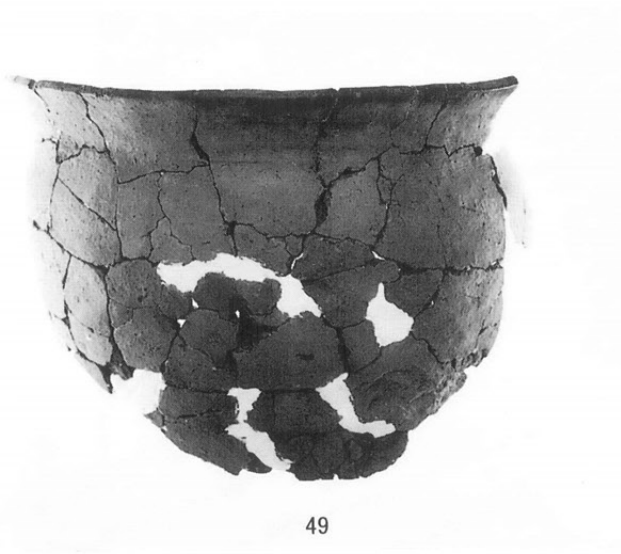
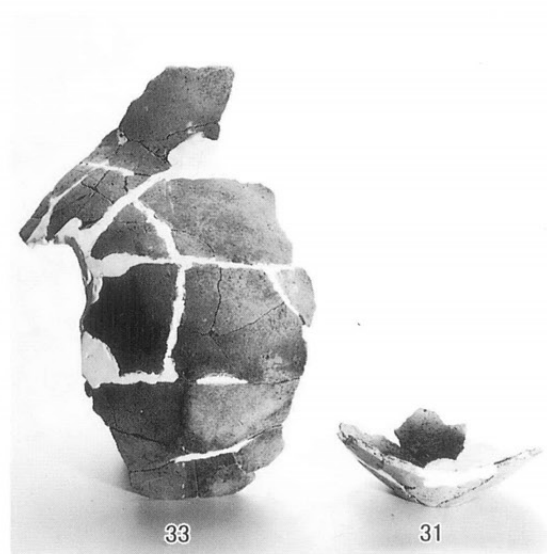
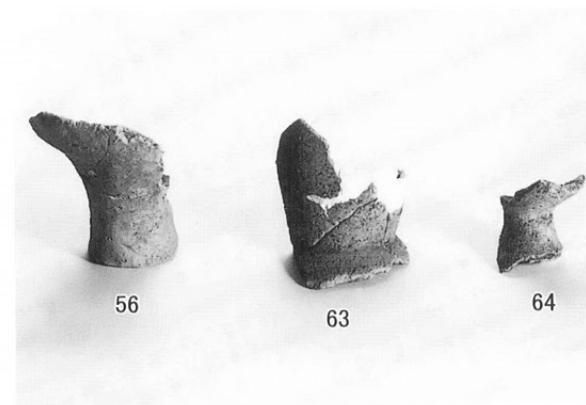
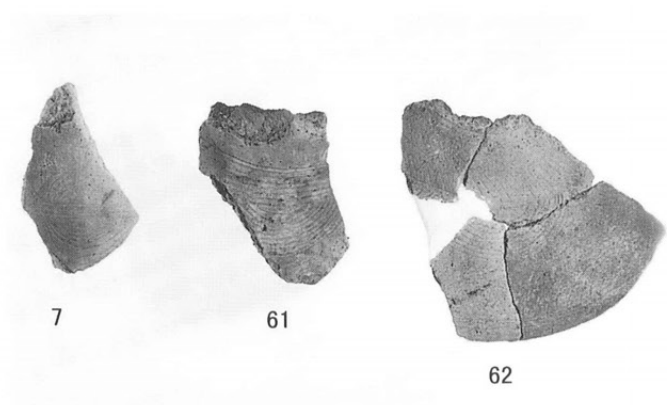
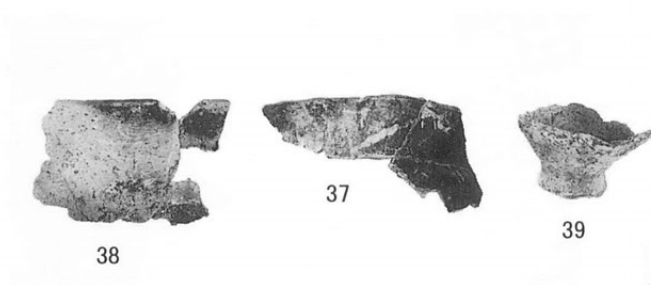
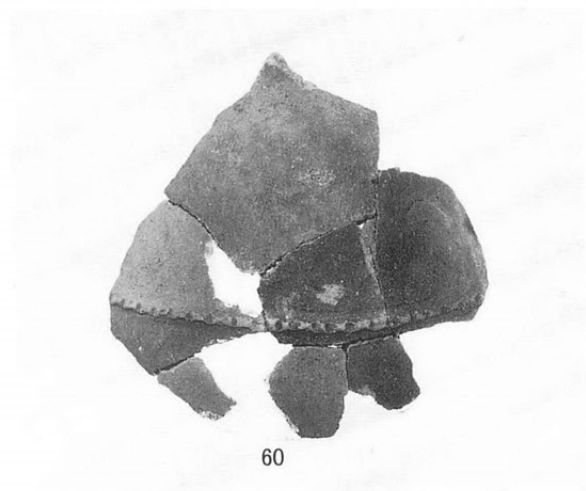
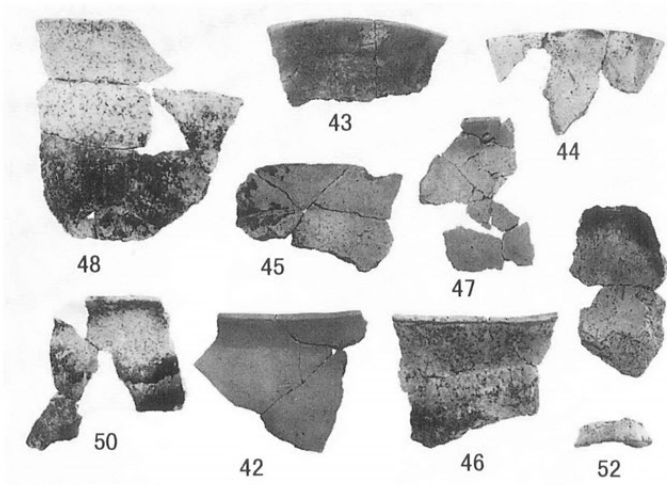
21



23

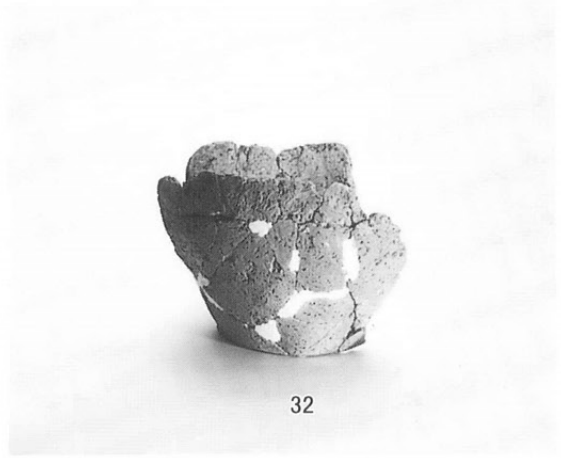


25





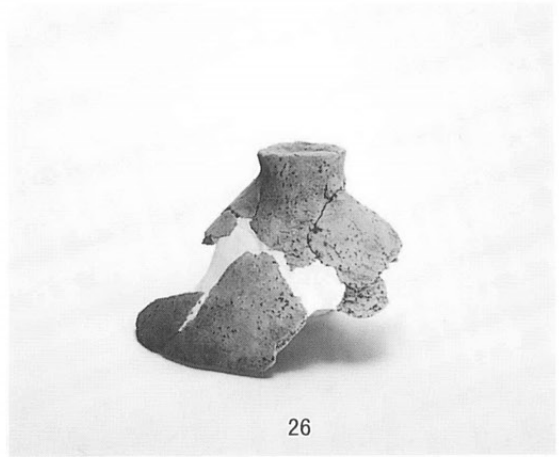
29



32



41



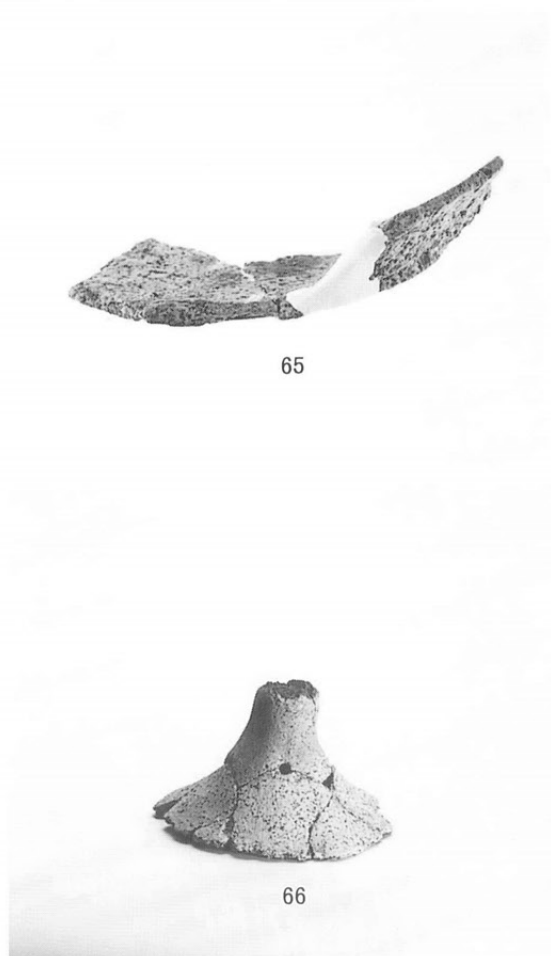
26



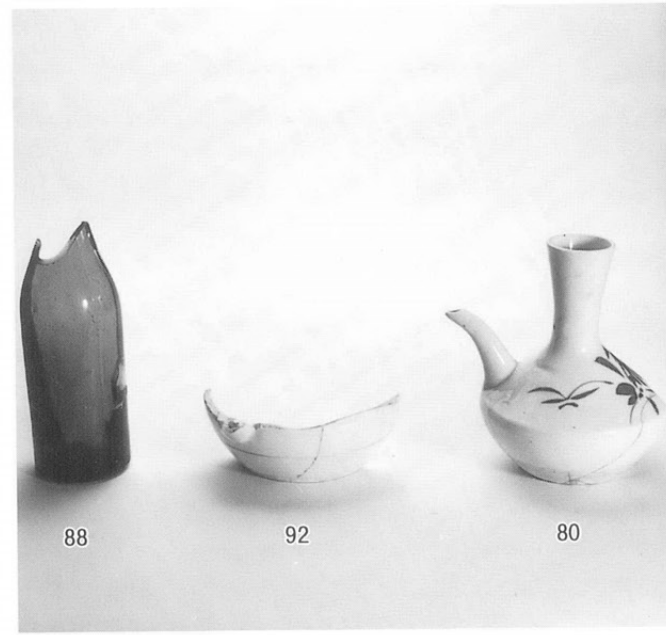
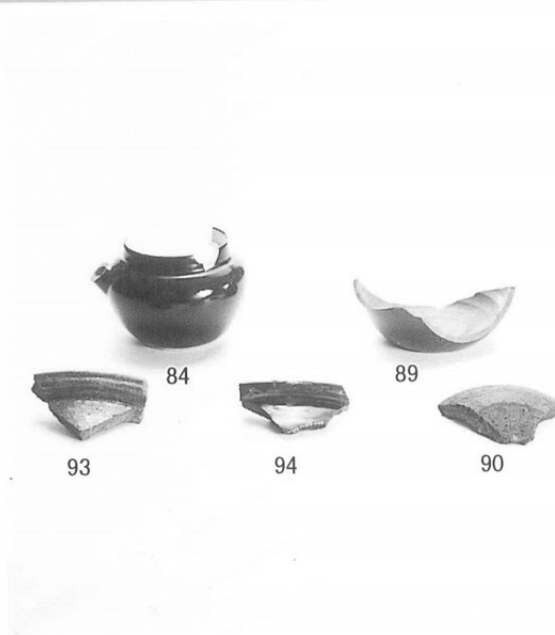
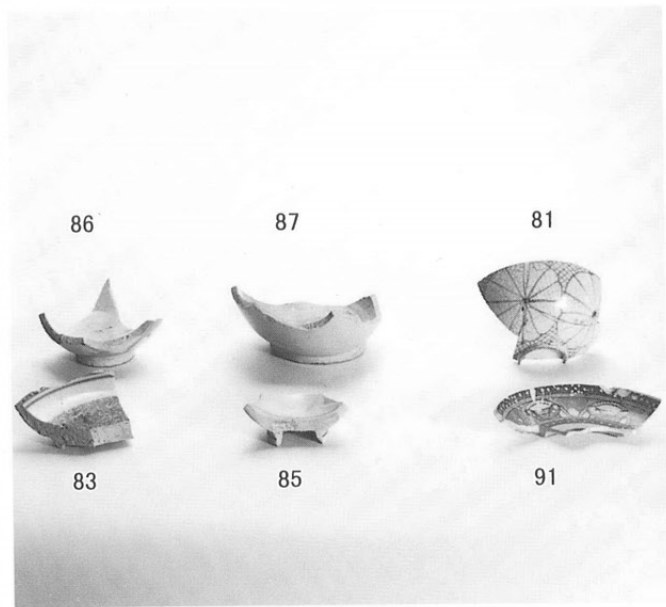
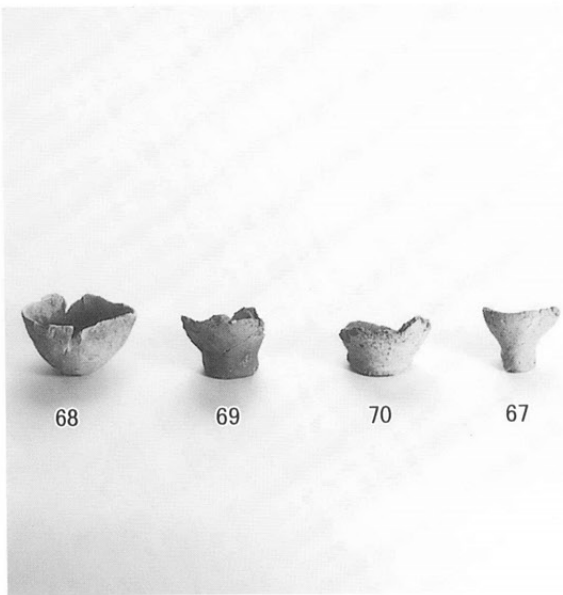
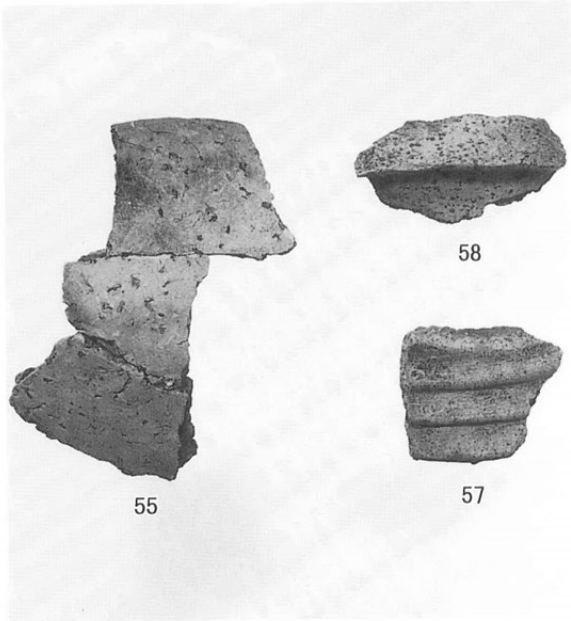
65



28



66





73



74



72



40



36



71



27



79



35



76



77



95



97



78



75



96

報 告 書 抄 録

フリガナ	オオクボガイ					
書名	大久保第2遺跡					
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第48集					
編集者名	矢部喜多夫					
発行機関	都城市教育委員会					
所在地	都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	1999年3月31日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大久保第2遺跡	都城市乙房町字大久保 付近	31° 45' 45" 付近	131° 03' 05" 付近	1997. 10. 14 ～1998. 3. 31	4,000m ²	民間開発
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
集落跡	縄文後期末 弥生前期 後期 中世 近世	周溝状遺構 1 竪穴住居 4 土坑 畝 柱穴 溝状遺構		縄文土器 弥生土器 近世陶磁器		

都城市文化財調査報告書第48集

大 久 保 第 2 遺 跡

1999年3月

編 集 宮 崎 県 都 城 市 教 育 委 員 会
発 行 〒885-8555 宮崎県都城市姫城町6街区21号
TEL (0986)23-9547 FAX (0986)24-1989

印 刷 株 式 会 社 み や こ 印 刷
〒885-0026 宮崎県都城市大王町51-22
TEL (0986)23-1682 FAX (0986)22-1682